

【巴マミ】 最後に残った  
道しるべ 【佐倉杏子】

ジジイキャベツ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

★

ほんの少しの、積み重ね

★

もしかしたらあつたかもしれない時間軸の話です。

・主役はマミさんと杏子です

・魔法少女まどか☆マギカ外伝、the different storyを元に  
した二次創作です。

本作は s s 速報VIP に投稿したマミ「最後に残った道しるべ」(未完) に修正を加えたものになります。

# 目次

【過去】	零話 はじまり	1	【頑張れと言った場合】	最後に残った道しるべ④	110
				最後に残った道しるべ⑤	128
				最後に残った道しるべ⑥	136
			【もういいんだよと言った場合】	最後に残った道しるべ⑥	145
				最後に残った道しるべ⑦	156
			【馬鹿だと言った場合】	最後に残った道しるべ⑥	162
				最後に残った道しるべ⑦	170
【現在】					
	回想録①	9			
	回想録②	16			
	回想録③	27			
	回想録④	45			
	回想録⑤	60			
	最後に残った道しるべ①	79			
	最後に残った道しるべ②	92			
	最後に残った道しるべ③	105			

# 零話 はじまり

\*\*\*\*\*

——魔法少女。

たった一つの奇跡と引き換えに、この世の呪いと戦う使命を背負った少女達を、あたし達はそう呼ぶ。

そうしてあたしは今日も人知れず、魔女と戦い続けている

あたしが今戦っているのは、牛のような形をした魔女。

こいつは、あたしが魔法少女になってから初めて戦った奴だ。

自分のテリトリーで逃げられたもんだから、落とす前つけにわざわざ隣町にまで来たんだけど……

「ったた……相変わらずなんて馬鹿力なやつ！」

あの時もそうだった。

あいつの斧での力任せの攻撃には手を焼いた。

悔しいが、力ではあいつに分があるようだ。

「だけど、今回はいつぞやの二の舞にはならないよ！」

そうだ。あの時はこの魔法を使えなかったが、今は違う。

この幻惑の魔法があれば、こいつとも戦える筈だ。

あたしとあたしの幻影。各々槍を構え、二人で魔女へ突撃していく。

そのうち片方が魔女へ跳びかかる。

あいつは、それを斧であっさり切り裂いた。

でも

「残念！そっちはニセモノさ！」

今度は、隙だらけになった魔女を真つ二つに切り裂いてやった。

魔女の姿は消え失せ、持っていた斧がカランと音を立てて地面に落ちた。

「よしっ、やっとリベンジ果たせた！」

「杏子、まだだ！」

「えっ？わっ!？」

喜んだのもつかの間、突如纏わりついたもやに、あたしの身体の自由は奪われた。

（こ、これはマズイ……！）

あたしの嫌な予感は、魔女の姿が復元されると共に確信へと変わった。  
魔女が、あたしを切り裂かんと斧を振り上げる。

（――！）  
迫りくる死の予感に、あたしは目を瞑ってしまった。  
そんな時だった。

「なるほど……幻惑の魔法、面白い力だわ」

声が出た。

恐る恐る目を開けてみると、魔女の斧に黄色のリボンが巻きつき、あたしへの攻撃を  
防いでいた。

「だけど、魔女の方も同じ能力だったのはついていなかったわね」

リボンを操っているその人は、巨大な拳銃を召還し、あたしに銃口を向けた。

「ちよっ」

「ティロ・フィナーレ！」

その巨大な銃から放たれた砲弾は、あたしの顔の真横を通り過ぎていった。

「な、なにすんだよ!？」

「ごめんなさいね。ちよつと荒つぽいやり方で」

「謝るくらいなら最初から… あれ?」

きがつけば、あたしに纏わりついていたもやは綺麗さっぱり消えていた。

どうやら、彼女の砲撃で消しさられたようだった。

「間に合つてよかつたわ。大丈夫?」

いつの間にか尻もちをついていたあたしに、その人は微笑みながら手を差し伸べてくれた。

ちよつと戸惑いながらもあたしは彼女の手を握り返し、照れくささに頬を掻きながら礼を言う。

「そ、その… 助かつたよ。あんたは…?」

「挨拶は後よ。今は魔女を倒さなくちゃ」

そう言う彼女の眼光は、とても鋭かった。年齢はあたしとさほど変わらない筈なのに、なんていうか、本当の『ベテラン』つてやつを感じた気がした。

そしてそれは気のせいなんかじゃなくて

「あの魔女、本体はおそらく斧の方ね」

「え？」

「だから身体の方を倒しても復活してしまうみたい」

この魔女と戦うのが二回目のあたしですらそんなこと思いつきもしなかったのに、この人は初見で、しかもたった数回のやり取りで見抜いていた。

「私は魔女の身体と使い魔を一掃するわ。その隙にあなたは本体を破壊してくれる？」  
「… わかった！」

あの人の戦いは凄かった。

ベレー帽を空に投げると、その中から振ってくる大量のマスケット銃。

それを撃つては持ち替え撃つては持ち替えて、次々に使い魔を消し去っていく。

残り一体だけとなった魔女が斧を彼女に振り下ろそうとするがもう遅い。マスケット銃を大砲に変え、砲弾は魔女に放たれ、その姿は消し去られていた。

そして、それを合図にあたしは斧へ向かって駆け出した。

「はああああ!!」

あたしの槍が斧に突き刺さる。耐え切れなかった斧は、音を立てて粉々に砕け散った。

「や… やった！」

「お見事ね！」

あたしは純粋に喜んだ。

やつとりベンジを果たせたことを。初めて他の魔法少女と共に戦ったことを。こんな凄い人と共に戦えたことを。

彼女の名前は、バマミ。

この町へ来た理由を話したあたしは、何故だか彼女の家招待された。

で、お近づきの印にとお菓子を振舞ってもらうことになって、その待機中。

鼻孔をくすぐる甘い匂いにあたしは思わず口元が緩んでしまう。

「……涎、出てるわよ」

テーブルに置かれた、彼女手作りのピーチパイと紅茶。

食べてみると、これがまたウマイ。職人顔負けのウマさだった。

「まだまだあるから遠慮しないでね。一人じゃ食べきれないから」

「いいの!？」

がつつくのように、テーブルから身を乗り出してしまったあたし。マミさんは、そんなあたしの様子をニコニコと笑顔で見つめている。

そんな自分の姿を省みて、ちよっぴり恥ずかしくなった。

「助けて貰ったうえにケーキまでご馳走になっちゃって、なんだか図々しいよね、あたしって」

「招待したのはこっちなんだし気にしないで。私も魔法少女の子と一緒にお茶できてうれしいもの」

「ならいいんだけど…」

そういえば、あたしと会ってからのマミさんはずっと笑顔だ。

あたしたち魔法少女は、毎日が戦いだ。無論、一般人を巻き込むわけにもいかないし、魔法少女同士だったら、グリーンフシードの小競り合いばかり。

それを踏まえれば、嬉しくなってしまうのも当然かもしれない。

「でも… あたしのほうこそ、今日マミさんと会えてよかったな」

「えっ?」

「あたし、魔法少女としてはまだ半人前だからさ、お茶しながら色んな話聞かせて貰って勉強になったよ。何も考えずに闇雲に戦ってたあたしと比べて、マミさんはこれまでの魔女との戦いを自己分析してノートに纏めたり、魔法の使い方を研究したり…。その上、戦いに必要な心構えもしっかり持って、実戦においても強くて頼りになる。こん

な凄い魔法少女が隣町にいたなんてあたし驚いたんだ」

「そ、そんなことないわよ」

　　ママさんの頬がほんのりと紅く染まったのを見てなんだか一気に親近感が湧いた。意外に照れ屋さんなのかな。

　　まあ、それはおいておいて本題はこつちだ。

「だから……その、ママさん。お願いっていうか、図々しいついでっていうのもなんだけど……あたしを、ママさんの弟子にしてもらえないかな？」

——これが、あたしと彼女の出会い。

　　あたしが憧れていた、彼女との出会い。

## 【過去】

### 回想録①

\*\*\*\*\*

マミさんの弟子にしてもらってから、ひと月ほど経った。

あたしの実力は、会ったばかりとは比べものにならないほど上達していた。

そして、あたしの実力に比例して、マミさんとの連携も格段によくなっていた。

マミさんとあたしのコンビだったら、向かうところ敵なし！心から、そう思えた。

だからか、自然とこんなことを口走っていた。

「今のあたし達ならさ、ワルプルギスの夜だつて倒せるんじゃないかな」

「ワルプルギスって…あの？」

「そう。魔法少女の間で噂されてる超弩級の大物魔女。こういつちや大袈裟かもしれないけど、あたし達だったらそんな大物の魔女だろうと目じやないって。世界だつて救えるんじゃないかって… そう思うんだよね」

「… ふふふつ、随分大きくでたわね」

「調子に乗りすぎ？」

「そんなことないわよ。目標は大きい方がいいんじゃないかしら」

「でも… 本当にそうかもね。私達だつたらきつと倒せると思うわ」

「もしいつか、本当にワルプルギスの夜がやってくる時が来たら… 一緒にこの町を守りましょう」

「うん！」

こんなことは、戯言なのかもしれない。

でも、いつかは実現できたら、それはとつても嬉しいなつて。

そんな甘い幻想をあたしは夢に描いていた。

## 夜、教会

魔女の反応を感じたあたしは、妹を起こさないようにベッドから飛び起きた。

反応の場所を追うと、そこは見慣れた場所。この教会の大聖堂だつた。

扉に近づくと、鼻孔をつくような匂いが漏れてきた。

意を決して扉を開けてみるとそこには…

「俺たちには神様の教えなんて必要なかつたんだ。そんなものに頼らなくても簡単に幸せになれる方法を知っているんだから」

「ええ、その通りですよ…」

生気を失くした虚ろな目をした父さんの信者たちが、聖書を中央に集め、それに大量の灯油をかけていた。

そんな信者たちの背後で踊る魔女に使い魔。

今まさに、魔女による宴が始まろうとしていた…

信者の一人が、マッチ箱を取り出した。

大量の灯油に火をつけたらどうなるか… そんなこと、考えるまでもない。

「させるかっ！」

あたしの魔法は幻惑の魔法。

そいつを使って、マッチ箱や聖書をお菓子に変える。

とはいえ、所詮は幻惑。そのままマッチを擦られれば何の意味もないが、一瞬だけでも気を惹ければそれで十分。

「いただきー！」

あたしは一気に駆けだし、信者からマッチ箱を奪いとった。

魔女が、餌場を荒らされたことに気付き、あたしに攻撃を仕掛けてくる。

「魔女なんかには、こんな場所で好き放題させてたまるかよ」

それに対して、あたしは分身の技、『ロツソ・ファンタズマ』で対抗する。

「父さんの教会も、家族も、みんな…。」

分身たちが魔女に消されていく。

その間をぬって、あたしは魔女に接近し

「あたしが守るんだから！」

槍で、魔女の身体を貫いた。

グリーンフィードが床に落ち、魔女の魔力が消え失せた。

「…厄介なもの残されたな」

床に転がる氣を失った信者たちと大量の灯油まみれの聖書。

こんなことが世に広まれば騒ぎになるに違いない。

(でも、夜明けまでには時間はある。それまでに片付けておけば…)

この時のあたしは、ひどく迂闊だった。

焦っていたのかもしれない。

魔女を倒せたこと、操られたみんなを助けられたこと、ママさんがいなくても一人で

戦えたこと…

その事実には少しばかり氣を抜いていたのかもしれない。

理由はどうであれ、とにかくあたしは迂闊だったんだ。

だから気付けなかった。

父さんが、すぐ傍にまでできていることに。

魔法少女として戦い終えたあとの反省会はいつものことだ。ただ、今回ばかりは勝手が違う。

「佐倉さん、具合が悪いの？近頃顔色が優れないみたいだけど」

今回の主役は魔女との闘いではなく、あたしだった。

「そう？平気だよ」

「……何かあったんじゃないの？」

「…… マミさんはさ、魔法少女になったのが原因で仲の良かった人と衝突したことってある？」

「…… 衝突とは違うけど、すれ違いなら多いかも。私たち、戦いの毎日だから遊ぶ時間も少ないでしょう？魔法少女のことを普通の人に相談できるはずもないし、クラスの子との係りも疎遠になってきていると思う。けど、今の生き方に後悔はないわ。仲間だつてできたしね」

「…… マミさん、前に言ってたよね。『誰かが魔女に憑りつかれて死んでしまったら、

きつと悲しむ人がいる』って」

「ええ」

「でもさ、あたしたちが憑りつかれた人の命を救ったとして、それが必ずしも喜ばれる結果になるとは言えないんじゃないかな」

「どういうこと？」

「たとえばさ、魔女の呪いでくるった人が、おかしな行動で自殺しようとしているところを、偶然身近な人に見られていたらどうなると思う？たとえば自殺を免れても、身近な人はその人を普通の目で見えることはできるのかな。」

もし喜ばれない結果になるんだとしたら、誰にも気づかれずに魔女に殺されて悲しまれるのと、気付かれたことで大切な人に避けられ続けて生き続けるの、どっちがマシなんだろう」

「結局みんなが嫌な思いをするのなら、最初からあたしは人助けなんてするべきじゃなかったのかな？」

「もしかして、あなた…。」

「そうじゃないんだ。たとえば話だよ」

「ただ、ママさんが誰にも魔法少女のことを話せないように、魔女の存在を知らない人達にこっちの事情を理解させるのは難しいのかなってさ…。」

「… 確かに、私たちのしていることを全て正しいと言い切るのは難しいかもしれないわ。でも、起こり得る結果を否定して、最初から救うべきじゃないという考えには賛成できないわ」

「…」

「… 無理はしないだね。私でよければいつでも相談にのるから」

「… うん」

ママさんはそれきり、あたしの事情を追求しようとはしなかった。

正直に言えばかなり助かってる。だって、こんなことママさんに言えるわけが無いし、あたしが言わなければママさんにも迷惑をかけることもないのだから。

## 回想録②

\*\*\*\*\*

… 聞いて、父さん

今日もね、あたしは魔女を倒したんだよ。自殺しそうになってた人を一人救ったんだ  
父さんがなくしたかった世の中の不幸や悲しみの芽を、あたしたち魔法少女は着実に  
摘んでいるんだ

これって、悪いことじゃないよね？

… あたしね、父さんの話いまでも好きだよ。だから、みんなが父さんに耳を傾けて  
くれたとき凄く嬉しかった

なによりさ、世の中の不幸に悲しみ続けた父さんの幸せそうな顔が見られたから。あ  
たしは…

「全部お前が生み出した幻想じゃないか」

「私の下を訪れた者たちはみな信仰のためなどではなく、ただ魔女の力に惑わされ惹きつけられただけの哀れな人々だ」

「そうして惑わした人々をお前は手にかけるつもりだったのだろうか？」  
違う。

「あれは悪魔と交わした契約の生贄だったのだろうか？教会の娘があることか悪魔に魂を売るなどと…」

あたしはそんなものなんかじゃない

「お前は最初から、私の話など聞く耳も持たれなくて当然の、誰の救いにもならない世迷言だと… そう思ってたんだろう？」

信じてよ父さん。

「ああ、全くその通りだ。私に世の中を救う力がないから、悪魔になど付け入る隙を与えてしまったんだ。お前が悪いんじゃない。全て私の責任なんだ…」

あたしは、魔女なんかじゃないんだ！

「なにが違うと言うんだ？」

「お前の力さえあれば、世の中の不幸や苦しみを着実に摘める？そんな当てつけがましい言い訳を聞かせるくらいなら、いつそ無力な父親だと罵ってしまえばいい！」

「今のお前がやっていることはなんだ？父親などいなくとも世の中は救えるのだと、信

仰を踏みにじり、人を惑わし嘲り笑う悪魔の所業ではないか」

「それすらの自覚もなく嬉々として語るお前の姿を… 魔女と呼ばずに何と呼ぶんだ」

母さん… どうしたの、その怪我…

「あ、あはは。ちよつとドジしちゃって」

「大した傷じゃないから大丈夫よ。だから心配しないで」

… 父さんなの？

「ッ！」

あたしのせいだ…

「違うわ、杏子」

父さんは悪くないんだ、あたしが…

「誰も悪くない。父さんも杏子も、みんなのためにつつと頑張っていただけなもの」

「大丈夫よ。今を乗り越えれば、すぐに前みたいに戻れるから」

…

「お姉ちゃん… 今日もいつちやうの？」

モモ。あたしがいない間、父さんと母さんを頼んだよ

「… 今度はいつ帰ってくるの？」

… 父さんは、あたしが家にいない時は大人しいんだ。だから

「やだよ… どこにもいかないで。わたし、我慢するから。絶対に泣かないから… だ  
から！」

… ごめん、モモ

「今日はまた随分と戦ったね」

… まだだ。こんなものじゃ足りない。

「そうは言っても、これ以上の戦いは命に関わることになるよ」

それでいいんだ。命がけで戦ってれば、父さんだっていつか信じてくれる。

「せめて、マミと一緒に戦えばいいじゃないか」

「ママさんには迷惑をかけられない。こいつは、あたしの責任なんだ。  
「なにを怯えているんだい？」」

うるさい…… いまはあんたの顔なんて見たくない！どっかにいけ！

あたしは、臆病者だった。

次第に家にいる時間も少なくなり、ママさんと一緒に闘うこともなくなつた。  
壊れてしまった父さんに魔女と罵られるのが怖くて。

ママさんや母さんとモモも、今は優しくても、いつかは見捨てるんじゃないかって怯えて。

誰とも向き合おうとしなかった。

傷つくのが怖くて、ずっと逃げていた。

もし、父さんともっと真正面から向き合つていれば。

もし、ママさんを本当に信頼できていれば。

もし、家族を守ることから目を背けていなければ。

きつと、こんなことにはならなかったかもしれない。

「ただいま…!?!」

久しぶりに家に帰ってきて気がついたのは、鼻孔をつく匂いだった。

その匂いは、普段から戦い続けているあたしにもなじみ深い、血の臭いだ  
そして、その原因となるものが、床に倒れていた。

血だまりに沈んでいるのは、父さんと母さんとモモだった。

「なんで…?」

わかりたくない。嘘だと思いたい。

でも、充満する血の匂いがこれは現実だとあたしに訴えかけている。

「なんでなの… マミさん」

あたしの家族の血だまりの中に、黄色の魔法少女が一人立っていた。

「あら、お帰りなさい佐倉さん」

血に塗れた身体のまま、いつもの声音で挨拶をしてきた。

「ね、ねえ…嘘でしょ？」

そうだ。こんなの、なにかの冗談に決まっている。

「ん？ああ、これね…」

きつと、倒れているみんなの治療をしてくれたから、ママさんは血塗れなんだろう。

もう、父さんつてば、どんなおつちよこちよいしたのさ。ちゃんと母さんとモモに謝っておきなよ。

「酷いのよ、この人。私たち魔法少女を魔女だつて罵るんだもの。あなたなんて、この人のために祈つたようなものなのにね」

ああ、そうか。ママさんは父さんを説得してくれたんだ。やっぱりすごいな、ママさんは。

「何度説明しても聞いてくれないからね、もう面倒になっちゃつて」

そういう時もあるよね。あたしだつて、モモがワガママ言つて言う事聞かない時は軽いゲンコツくらいはしたもん。

だからさ、謝らなくていいよママさ

「ついで、殺しちゃつたの」

息が止まる。全身を針で縫い付けられるような感覚がした。

「これで私たちを否定する邪魔者はいないし、早速魔女を倒しにいきましょうか」

あの人がなにか言っているが、もう何も聞こえない。

「うう…」

「あら、まだ死んでなかったのね」

あの人が、モモの頭を踏みつける。それでも、身体は動いてくれない。

「あぐ…」

「んー、あなたは別に魔法少女をバカにしてはなかったけど…」

あの人が、マスケット銃を創り、銃口をモモの頭に突きつける。

「一人だけ残しても可哀想だし… それに佐倉さんには私がいるから別にいいわよね」

あの人は、銃をモモに突きつけたまま、クルリと顔をこちらに向けた。

「ねえ、佐倉さん」

あいつの満面の笑顔を見た時、あたしは弾けるように駆け出した。

——殺す

「ちよつと、なにをそんなに怒ってるのよ」

あいつがリボンであたしの槍を防ぐ。

そのままリボンごと突き刺そうとするが、あいつの蹴りが腹に入り、あたしが吹き飛ばされる。

——殺してやる！

もう一度あいつとの間合いを詰め、槍を突き出すが、あいつにはただの一掠りもしない。

ならばと槍を本来の形である多節根に変え、あいつの全身を絡め取り、壁に叩き付けた。

そして、今度こそはと槍を突き出す。しかし右肩を撃たれ、槍を手離しはしなかった。が威力と勢いを殺がれ、あいつにまた躲された槍は空しく壁を壊すだけだった。

「乱暴な戦い方ね」

——絶対にお前を許さない！

痛みを無視して、あたしはあいつのもとへ駆け出す。

そして——ドン、と銃声が、響いた。

どれくらい経ったのだろうか。

あたしは、まだ生きているみたいだった。

あいつにもそれなりの手傷は負わせれたようだが、もう姿が見えないことから、動ける程度のものであったのだろう。

「…… 父さん」

名前を呼ぶが、返事はない。

「…… 母さん」

辛うじて動く左腕だけで、床を這う。

「…… モモ」

全力を出しているが、まだ遠い。

「……」

やっとみんなのところへ辿りついたと思ったたら、眠くなってきた。

もう、なにをする気も起きない。全部投げ出したい。

そう思い、意識を手放そうとしたその時

かすかに聞こえる呼吸の音に、ちよつとだけ安心した。

## 回想録③

---

「教祖様が死んだ」

「なぜだ？」

「殺された」

「誰に？」

「わからない」

「この前教祖様は魔女を見せてくれた」

「そうだ、きつと魔女に殺されたんだ」

「探そう、魔女を」

「「みんなで探そう」」

---

「うっ…」

痛みと共に意識が覚醒する。

瞼を開くと、そこには白い天井が広がっていた。

「目が覚めたかい？」

「こちらの顔を覗き込んでくる白衣の初老の男へと視線を合わせる。

「……は……」

「病院だよ。教会に重傷人がいるって通報があつたんだ」

「教会……っ！」

思い出した。あたしは、マミさ…… あいつにやられて、父さんたちも……！

「と、父さんは!? 母さんは!? モモは!?」

跳ね上がるように上半身が起き上がり、医者 of 肩を力強く掴む。

「お、落ち着いて……」

「早く教えろ! どうなんだ!? おい!」

「落ち着いて!」

「いいから教えろ!」

わかっている。あいつは確かに自分の口で『殺した』って言ったんだ。

だから、みんなはもう……

「うへへ〜おねえちゃん〜」

「そ、そこに…」

呑気な声音で寝言を漏らす妹に、あたしはあんぐりと口を開けてしまった。

・  
・  
・

世間では、あたしたちは強盗事件の被害者として扱われている。

一命を取り留めた母さんとモモがそう証言したらしい。

医師が言うには、母さんとモモに大した怪我はなかったらしく、むしろあたしの方が何倍も重傷だったらしい。それでも、普通の人でも一生は残らない程度だったらしいが。

ただ、父さんだけは助からなかった。

死因は、幾分か失血と、大きな衝撃を受けたことによるショック死。

多分、あいつが殺したというのは本当だろう。

あいつは、父さんを殺したやつなんだ。

なのに、あたしは居場所も手の内も知り尽くしているあいつを殺しに行く気にはならなかった。

もし、この訳の分からない気持ちにケリをつける方法があるとすれば、それは…

「母さん、身体は大丈夫？」

母さんの病室へ向かい、調子を尋ねる。

「ええ。元々大した怪我じゃなかったみたいだから」

「そっか。よかった…」

「……」

沈黙が訪れる。

母さんは気まずそうに、あたしから目を逸らす。

あたしはあたしで、いつ切り出そうか迷っていた。

だが、もう覚悟を決めるしかない。

「母さん、教えてくれないかな。あの日、何があったのか」

今度こそ、自分の罪と正面から向き合うために。

見た目には、大分酷い怪我のようだったが、そこはやはり魔法少女。

回復魔法は得意ではないが、ものの三日ほどで傷は治ってしまった。

入院費もバカにならないため、あたしたちは早々に退院させてもらうことにした。それでも、しばらくは今あるお金でやりくりするしかない。

これからは、生きるだけでも大変な試練となるだろう。

でも、その前に

「……ごめん、二人とも。先に帰ってて」

「……ええ。夕飯の支度をして待つてるからね」

「行つてらっしゃい、おねえちゃん！」

「ああ、行つてきます」

ケリを着けなければならぬ。

あたしの、魔法少女としての罪に。

---

佐倉さんが私に姿を見せなくなつてから、数週間が経過した。

あの相談を受けて少し経つてから、彼女はなんの音沙汰も無くなつた。

キュウベえに聞いても、『本人が拒否している』だの『僕はあくまでも中立だからね』だのと、なにかと理由をつけて教えてはくれなかつた。

思えば、あの相談の時、佐倉さんは何でもないと言つていたけれど、それが嘘なのは

一目瞭然だった。

あの時は、彼女の意思を尊重して深く追及はしなかった。

しかし、彼女の性格上、なにもかも抱え込んでしまう気がするし、ここまで音沙汰がないと不安になってしまう。

もし、彼女がなにか無理をしているのなら力になりたい。

そこで、私は彼女の家に行つて直接調べることにした。

「たしかこの辺りに……あつた」

それほど多くは訪れていなかったのですが、地理には不安があつたが、なんとか辿りつくことができた。

とはいえ、いきなりやってきて『あなたの悩みを解決してあげるわ!』などと佐倉さんに言つても、彼女は隠し通してしまふだろう。私だつてそうする。

どうすれば聞きだせるか、悩んでいたその時

「!!」

教会の中から、怒声が響き渡つた。

聞こえる声は三つ。

一つは、なにやら怒鳴り散らしているような、男性の声。

一つは、それに対して反論しているような、女性の声。

最後の一つは、今にも泣き出しそうな、少女の声。

喧嘩でもしているのだろうか。

仲の良さそうな家族でも喧嘩はするだろうから、珍しくはあっても、不思議なことではない。

だが、それにしても異様だ。

うまく言えないが、喧嘩の域を超えて、今にも殺しにかかりそうな…

やがて、一切の音が止み、教会は静寂に包まれた。

流石におかしいと感じた私は、すぐに教会の扉を叩いた。

「ごめんください。バママミです。なにかあったんですか？」

だが、返事は無し。扉を更に強く叩く。更に大声で呼びかける。それでも返事は無し。

今のいままで言い合ってたのだから、寝ているなどあり得ない。

ならば、仲直りをした安心感から聞こえていないのか？それでも、ここまでして聞こえていないのは考えにくい。

まさかと思ひソウルジエムを確認するが、しかし反応はないため、魔女も使い魔も関係がないようだ。

「…仕方ないわね」

ただの杞憂で終わればそれまでの話だ。

幸い、扉には鍵がかかっていなかったため、すんなりと開けることができた。

——もし、私の決断があと数分でも早ければ、もつと素敵な未来があったのかもしれない。

真つ先に目に入ったのは、椅子の上に立ち、天井から吊るされたロープで、今にも首を吊ろうとしている佐倉さんのお父さん。

なにをしているのか？ 決まっている。

これは——自殺だ。

「だ、ダメっ！」

すぐに変身して、マスケット銃でロープを撃つ。

ロープに体重をかけていたため、それを失った佐倉さんのお父さんのバランスが崩れ、椅子から転げ落ちた。

すぐさま駆け寄ろうとするが、しかしなにかに躓き、顔面から床に倒れ込む。

その私が躓いた何かを確認した時、私は己の目と正気を疑った。

そこに倒れていたのは、紛れも無く

「モモちゃん…お母さん…」

床には、大量の血が飛び散っていた。

「なんで…」

その血は、紛れも無くモモちゃんと佐倉さんのお母さんのもので

「なんでなのよ!?!」

彼女たちの有り様は、私から冷静さを奪うには十分だった。

私は、周りを見ることもなくすぐに二人に魔法をかける。

私の魔法は結びつけることに特化した魔法。

それなりの治療効果もあり、あまりにも酷い傷でなければ治すこともできる。

発見が早かったためか、流れていた血は止まり、二人の呼吸も安定してきた。とりあえずは一命を取り留めたようだ。

(なにがあつたのかしら)

聞こえてきた声は三つ。自殺しようとする佐倉さんのお父さんと、刺されたモモちゃんとお母さんという現状。

なにが起こつたかなんて考えるまでもない。

(ひよつとして、強盗にでもあつた…?)

だというのに、有り得ない可能性ばかり考えてしまう。

(それとも、魔女が使い魔が…?)

つい先程自分で否定した可能性をあげてまで、目の前の現実から目をそらしてしまふ。

そんな私が、背後に振り上げられた凶器に気付けるはずもなかった。

背中に走る灼熱、激痛に、私は前のめりに倒れる。

どうにかして身体を起こそうとするが、しかし仰向けになつたところで押さえつけられてしまった。

左手で絞殺さんばかりに首を絞められ、私は呼吸すらままならなくなつた。

どうして、と私が問う前に彼は喚き散らした

「お前も…なのか！」

「… えっ?」

「お前も魔女なのか! お前が杏子を唆し、悪魔に付け入れさせたのだな!」

「な、なにを…」

「消え失せろ! 私の前から、この世から! この薄汚い魔女め!」

彼が、凄まじい形相で掴みかかってくる。

なんのことを言っているか分からないが、それを聞いている余裕はない。

空いている右手に包丁を持って、彼は私のお腹に突き刺した。

痛みが私の脳内を支配し、絶叫が教会に響き渡る。

それでも、まだ終わらない

包丁を私のお腹から抜き、また突き刺す。

何度も、何度も、何度も。

激痛に耐えかねた私は、無意識の内に彼の左腕を思い切り掴んでいた。

魔力で強化された身体は、一般人の能力を遙かにしのぐ。

バキリという嫌な音と共に、佐倉さんのお父さんが悲鳴をあげる。

その隙に、床を這って彼から距離をとる。

だが、そこまで。魔法少女は死にくいとはいえ、痛覚もあれば、疲れもある。

あまりの痛みに、身体の重たさに、私の意識は白い靄がかかったかのように朦朧としていた。

「なぜ抵抗する?!忌まわしき魔女風情が!」

包丁を振り上げた彼が、再び私に襲いかかってくる。

その先にあるのは、私の死。魔女との戦いで、何度も味わってきたこの悪寒。やられる... そう思ったときだった。

「やめて... パパ...」

目を覚ましたモモちゃん、彼に必死に縋り付いた。

「ママお姉ちゃんをいじめないで... ぶつならわたし...」

でも、その懇願は彼の怒りを買ってしまったようだ。

「モモ... なぜお前が魔女を庇う! お前までそうなのか!」

「違う... わたしはおねえちゃんと約束したの。絶対になにをされても我慢するつて... だから」

「あああ... なんとということだ。せめて、魔女に唆される前にとお前たちを手にかけて

というのに、既に憑りつかれていたとは……！」

彼が、モモちゃんの首を締めあげる。痛めた腕のどこからそんな力が湧いてくるのか、彼女がいくら苦しんでも彼は力を緩めない。

「魔女は生かしておけない……私が浄化してやる」

「やめ……ッ！」

声を出そうとしても、喉を込み上げる血塊に遮られてしまう。

だが、次の手を考える間もなく、彼の刃はモモちゃんへと振りかぶられる。

リボンがマスクト銃に変わる。

必死だった。なにも見えなくなっていた。考える暇さえなかった。

そんなものはなんの意味も為さない。

意味があるのはただ一つの事実のみ。

弾丸は、佐倉さんのお父さんの心臓を貫いた。

「はあ、はあ…」

彼の身体に魔力を流す。

既に血は止まっている。傷口も塞がっている。

「お願い… 目を覚まして…」

なのに、彼は一向に目を覚まさない。呼吸をしない。

… 当然だ。彼は既に死んでいるのだから。

側で倒れているモモちゃんとお母さんを見比べる。

よく見ると、顔や身体のと至るところに怪我を負っている。

先のモモちゃんの言葉がよぎる。

きつと、どんな目に遭っても耐えてきたのだろう。

きつと、それでも未来を信じていたのだろう。

「…ごめんなさい」

私に泣く資格などない。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

それでも、謝罪の言葉と零れ落ちてしまう。

どれほどの時が経っただろう。1分か10分か1時間か…

涙は枯れ、頭も冷静さを取り戻していく。

私は、全てを奪ってしまった

謝罪も償いも、なんの意味もない。

ならば、私にできることはひとつだけ。

ガチャリ、と扉が開いた。

「マミ…さん…?」

「お帰りなさい、佐倉さん」

罪は、私が全て引き受ける。

---

佐倉さんから受けた傷を引きずりながら、私は教会からの帰り道を歩く。

「マミ、どうして杏子に真実を話さなかったんだい？」

心底不思議そうに首を傾げるキュウベえに、私は確かな苛立ちと怒りを覚える。同時に、己に対する嫌悪感も。

「君は自分の身と彼女の妹を守った。ただそれだけじゃないか」

真実はひとつだけいい。

「……言えるわけ、ないじゃない」

私は、自分の人生を捧げてまで力になろうとした佐倉さんの大切な人を

「彼女のお父さんが、家族を殺そうとしたなんて」

この手で殺したんだ。

魔法がうまく使えない。

魔法をリボンで拘束しても、すぐに解かれてしまう。

マスケット銃の威力も、明らかに弱い。

なんとか倒せたものの、これでは次の闘いではどうなるかわからない。

「厄介なことになったね、ママ。魔法の調子が悪いんだろう？」

「……どうして？」

「君の願いは『生きる』ことだったね。おそらく君は潜在意識でその願いを拒絶しつつあるのだろう。魔法少女に与えられる魔法の属性は、叶えた願いの内容に直結しているか

らね」

「このままでは、いずれ魔法自体が使えなくなってしまう。そうなれば、今後の戦いは相当不利になるだろうね」

「… なるよ、それ」

なにをしてるんだろう、私。

お父さんとお母さんを見捨てた癖して、のうのうと生き延びて。

魔女や使い魔を倒すことを使命に置き換えて、生きる言い訳まで作って。拳句の果てに、大切な人の大好きな人を殺したくせに。

——自分すら、満足に守れないなんて。

雪が降っている。

私は、雪の中に埋もれている。

雪は、魔女との戦いで傷ついた私の身体から容赦なく体温を奪っていく。

眠い。疲れた。休みたい。

もう、何をする気も起きない。

このまま死ぬのなら、悪くないかもね。  
そんなことを思いながら、私は眠りについた。

「.:.: 見つけたよ」

——雪が、止んだ気がした。

## 回想録④

どこ…？

ここは、どこ…？

真っ暗…

私は死んだのかな…？

暖かい…

生きてる…

私はまだ生きている…！?

目が覚める。

そこには、見慣れた天井。見慣れた布団。見慣れた時計。

(私…なんで…?)

今度こそ、死んだと思ったのに。

「目、覚めたか？」

そして、ここへと運んだと思しき人は、ここにいるはずのない彼女で。

「さ、佐倉さん…？」

思わず目を瞬かせる私に構わず、佐倉さんは沸かした白湯を渡してくれた。

「悪いね、勝手に上がらせて貰ったよ」

「あなた、なんで…」

なぜ彼女が私を気遣うようなことをするのか分からない。

私は佐倉さんの家族を傷つけ父親を殺した。

それが佐倉さんにとっての真実のはずなのに。

「… 母さんから聞いたよ。母さんとモモを傷付けたのはあんたじゃないって」

「…！」

よくよく考えてみればそうだった。

私が撃つた場面を直接目撃していなくても、それ以前に殺されかけていたのは彼女たち本人なのだから隠しようがないことだ。

「よく考えればおかしな話だったよ。あたしのソウルジエムもあまり濁ってなかったしさ。どうせ、こつそり病院に忍び込んで浄化してたんだろう？ 悪役ぶりたいなら徹底的にやるべきだったね…。ま、それができるならあたしはあんたの弟子にもならなかった

だろうけど」

徹底的に、と言われても、あれ以上二人を傷つけることなんてできやしなかったし、あらかじめこう伝えて欲しいなどと打ち合わせする暇もなかった。

騙し通すのは最初から無理だったという訳だ。

「……でも、あなたのお父さんを殺したのは事実、だわ」

そう。佐倉さんのお父さんを撃つただけは間違はなく事実。これを弁明するつもりなどないし、私を恨むことで佐倉さんが救われるならそうあってほしい。

「……ああ、それだけは許せない。どんな状況だったとしても、あたしはアンタを許さない」

「……」

佐倉さんの刺すような視線が痛い。でもこれでいい。むしろ彼女の幸せを壊してしまつた私には生ぬるいくらいだろう。

「けどな」

言葉を区切つた途端、佐倉さんから感じていた視線の刺々しさが瞬く間に消えた。

「あんたは、モモと母さんを助けてくれた。それいつもまた事実だろ」

「え……？」

「あたしは、今までみんなに甘えてたんだ。誰も悪くないと慰めてくれる母さんに、こん

なあたしでも信じてくれるモモに、力になろうとしてくれるあんたに。

でも、そのせいであたしは父さんをあんたに背負わせちゃまった。本当なら、ふんじばつてでもあたしがなんとかしなくちゃいけなかったのにな」

「……」

「だから……さ……」

それまで強気だった彼女の肩が震えだし、語気も弱弱しくなっていく。

「頼む……これ以上、あたしの大切な人を奪わないでくれ……勝手に背負いこんで、勝手に死のうとしないでよ……」

佐倉さんが縋りつくように私の胸に顔を埋めると、身体を通じて彼女の震えが伝わってくる。

佐倉さんの大切な人。

それは彼女の家族であり、そして……

「……私、あなたのお父さんを殺したのよ？」

「……わかつてる」

「あなたの祈りも、一番大切なものも全て奪ったのよ？それでも、あなたは私を大切な人と呼んでくれるの？」

「当たり前だ！」

佐倉さんの叫びと共に、私の頬を温かいものが伝う。  
今の私に、それを止めることなんてできやしなかった。

「……ごめんなさい」

そうだ。最初から、私たちはこうしていればよかったんだ。

「……許さない」

見栄を張らずに、素直に感情をぶつけあって。

「……ごめんなさい」

「……違う」

「……ありがとう」

見せかけの嘘なんて、いらなかったんだ。

そうして、しばらくの間、わんわんと二人分のみつともない泣き声が小さな部屋の中で響き渡るのだった。

それからどれくらい経っただろう。

泣きつかれた私たちはようやく落ち着いて、真っ赤に晴れ上がった目を見てお互いに「ひどい顔」とけらけら笑いあって。

ほんの少し前まで当たり前だったそれが、なんだか凄く懐かしいものになったと感慨にふけてしまった。

「…ねえ、マミさん。あたしき、しばらくあんたから離れようかと思ってるんだ」

そろそろ母さんたちが心配するから、と帰ろうとした佐倉さんは唐突にそう切り出した。

「え…？」

どうして、と私が聞く前に彼女は強い決意を宿した目で口を開く。

「やっぱりき、このままだとしてもマミさんに頼りつきりになっちゃうと思うんだ。だから、あたしはもつと強くなりたい。」

護られるばかりのあたしじゃなくて、護れるあたしになりたいんだ」

だから、と言葉を切ると、彼女は拳を突き出しニカリと笑みを浮かべた。

「マミさん。今度組むときは、弟子じゃなくて相棒だ」

私は思わず唇を噛み締めた。

悔しいとか悲しいとか、そんな感情じゃない。

佐倉さんが私を対等に見てくれることがこの上なく嬉しかったんだ。

「…わかった。けど、絶対に無茶だけはしないでね」

「わかってるよ。どうしようもなくなつた時は、絶対に今回みたいに隠したりなんかしない。ママさんこそ、また魔法が使えなくなるまで自分を追い込まないでよ」

「もちろんよ。あなたに貰つたこの命、罪を償うまで決して無駄になんてしない」  
突き出された拳に、私も握つた拳をコツンと当てる。

「… またね、ママさん」

「またね、佐倉さん」

『それじゃまたね』って手を振つて、無理に笑つて寂しくなつて…

でも、これは決別なんかじゃない。

これは、私たちが強くなるための約束。

もう誰も失わないために、誰にも背負わせないために必要な誓いだ。

私たちはそう思っていた。

そう、思っていたんだ。

静寂に包まれた教会の中、杏子の母は夕食の準備を、モモは教会中の片付けに奔走していた。

「お姉ちゃん、マミお姉ちゃんと仲直りできたかなあ？」

「大丈夫よ。杏子は、マミさんのことが大好きなもの」

「… うん、そうだよね。私もマミお姉ちゃんが大好きだもん」

（… ごめんなさい、あなた、杏子。『いつかは元通りになれる』なんて無責任なことを言っつて、ロクに言い返すこともしなかったから、こんなことになってしまった… ごめんなさい、マミさん。あなたにはとても辛いものを背負わせてしまった…）

「お母さん、泣いてるの？」

心配そうに顔を覗き込むモモを見た途端、ため込んでいたものが溢れ出したかのよう  
に、思わずモモを抱きしめる。

「ごめんね… ごめんねえ…」

「お母さん…」

まだ幼いモモにはなぜ母が泣いているのかもわからないし、なぜ父がいなくなったの  
かもわからない。

マミと杏子がなんで喧嘩したのかもわかっていない。

ただ、みんながみんな悲しんでいたのはなんとなくわかっていた。

だったら、皆が泣き止めばきつと前のように楽しく過ごせるしお父さんも喜んでくれるはずだ。

モモは、自分が泣いていた時にいつもしてもらったように、母の頭をよしよしと撫でる。

ギイ、と教会の扉が開いた。

「悔やんでいるのですか？」

「え……？」

その声を皮切りに、ぞろぞろと人影が集っていく。

「ならば、すぐに懺悔しにいきましょう」「そう、いますぐ彼に懺悔をしましょう」「そう」

「我らの教祖様に！」

---

「……強くなつてやる」

「マミさんの家からの帰り道、言葉に出してもう一度決意する。

「もう、母さんにも、モモにも、マミさんにも失くさせなんかしない。押し付けたりなんかしない」

「今まで散々助けられてきたんだ。だから、今度はあたしの番なんだ。」

「あたしが、みんなを助けるんだ」

あたしの戦いは、これからだ！

そんなあたしの決意は、唐突にあっけなくへし折られた。

「な、なんだ…!?!」

もうもうと立ち昇る煙。

方角は、あたしの教会。

(まさか、火事…!?)

ふと、父さんに魔法少女のことがバレた日のことを思い出す。

あの日、信者たちは教本を燃やして火事を起こそうとしていた。

もしあたしの予想通りなら……！

「母さん、モモ！」

急いで、ただひたすらに急いで木々の間を駆け抜ける。

服が枝に引っかかり、時折皮膚を裂いていくが、気にしている暇はない。

そうして教会に着いた先、あたしを待っていたのは——

「やっときた」

「やっときた」「魔女だ」

かつて父さんの言葉を信じさせられた彼らと目があう。

「魔女だ」

彼らの生気を失った目が、あたしを睨みつける。

「ついに見つけた」

この時、あたしは逃げるべきだったのだろうか。

「殺せ」

それとも、殺されることは承知の上で、父さんを壊した罰を受け入れ、彼らにこの身を引き渡すべきだったのだろうか。

「教祖様を殺した魔女だ」

なかが正しかったかなんてわからない。

「魔女は殺せ」「魔女は殺すんだ」

だが、あたしは自分を止めることなんてできなかった。

「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」

燃えさかる教会を背景に、打ち捨てられたそれと目が合った時、あたしは

「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」  
 「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」  
 「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」  
 「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」「殺せ」

ア  
タ  
シ  
ハ……

「……」

気が付いた時には、辺り一面は真赤になっていた。  
だいぶ暴れたためか、教会の火も消え去っていた。

「……」  
信者たちの腕が、脚が、臓物が。教会中に散らばって、メチャクチャに転がっている。  
「……」  
母さん、モモ

「……」  
既にこと切れている二人の首を探し出し、抱きしめた。  
「……」

魔女の気配は感じられない。

信者たちは魔女に操られていたわけでもなかった。

信仰対象である父さんを殺した元凶があたし達だと判断し、皆で敵討ちにでもきたの  
だろう。

「……ハハッ」

笑えてくる。

人間に害を為す魔女を倒す魔法少女が、自分の願いで集めた可哀想な一般人を殺した  
んだ。

家族も大勢の人も、あたしがみんな不幸にしたんだ

なんてことはない。父さんの言ってたことは正しかったんだ。

「クツ……ハハハハハ……！」

……いや、魔女の方がマシだろうなあ。

魔女だつてグリーンフィードを落とせば魔法少女が喜ぶ。

あたしは違う。あたしがなにをしようが喜ぶヤツなんていない。

あたしがいなくても困るやつなんていない。

父さんにも母さんにもモモだけがいればよかったんだ。

そうすればこんなことにはならなかった。誰も不幸にはならなかったんだ。

「アハハハハハハ!!」

あたしは魔女でも魔法少女でも、ましてや人間でもない。  
存在することすら間違っていた、クズなんだ。

——パリン、とあたしの何かが割れたような音がした。

## 回想録⑤

「ねえ、『人喰い教会』のウワサって知ってる？」

「なにそれ？」

「ちよつと前に、隣街の外れの教会で変わった教祖様がいてね。その人の演説はとても素晴らしくて聞いた人はみんな虜になっちゃうらしいの。でも、その教祖様は強盗に殺されちゃって…。でね、それ以来、教祖様の怨念で、その教会に入った人は誰も帰ってこないんだとか…。」

「他にも色々とうワサの種類があつてね。たまたま入る前に引き返した人の話らしいけど、帰ってこれないのは、教祖様じゃなくて教会に住み着いている魔女のせいとか、もつと怖い大きな化け物の仕業とか…。」

「な、なんだか怖いね…。」

「あなたたち」

「あつ、巴さん。おはよー」

「さっきの話、詳しく聞かせてくれるかしら」

「なにに？巴さんもオカルト系に興味あるの？」

「… ちよつとね」

クラスの子から噂を聞いた私はその放課後、私はすぐに佐倉さんの教会へと向かった。

教会は、以前の面影はまるでなく、外装だけでなく内装も荒らされつくしていた。

ソウルジエムの反応を辿ると、やはりそこには結界の入口が。

「… やつぱり、魔女がいるわね」

佐倉さんがここの魔女を放っておくはずがないが… まさか… !

(いえ、きつと… きつと、モモちゃんたちと逃げてくれているはず！)

きつと、魔女が思ったよりも強く、仕方なしに一時撤退しているだけだ。

私に連絡が無いのは、彼女が電話を持っていないだけだ。

そんな無理のある推論を信じ込むように己に言い聞かせ、私は結界へと足を踏み入れる。



た。

(いったいなんの目的でこんな：：)

気持ちを着かせ、回廊を進んでいく。

武士のような使い魔が端に並んでいるが、私を攻撃するどころか、行く手を阻む素振りすら全くみせない。

不思議には思ったが、無用な戦いを避けられるのなら好都合だ。

使い魔を顧みず、そのまま奥へ奥へと進んでいく。

そうして、私は結界の主と対峙した。

主は、長槍を片手に華やかな赤い衣装を身に付けた細身の人型で、頭部は蠟燭に灯された火になっており、白馬にまたがってこちらを見つめていた。

「あなたが彼らを：：？」

「：：：：」

「：： 聞くまでもないわね」

マスケット銃を構え、魔女に放つ。

しかし、魔女は幻のように姿を消し、私の弾丸は空を切った。

私の右方向から槍が突き出されるが、それを寸でのところでき付くことができ、紙一重でかわす。

「この…っ！」

魔女へと向き合ったとき、私は“それ”と目があった。

魔女の背後に佇むひとつの長方形のテーブル。

一番奥には、神父の服装をした男性が座っている。

左右に、モモちゃんと佐倉さんのお母さんが別れて、互いに向かい合って座っている。そして、席はあとふたつ。

一つは空席。もう一つ、うなだれているかのように座っているのは…

「佐倉さん！」

魔女の脇を通り抜け、私は彼女たちのもとへと駆け寄る。

不思議なことに、魔女は無防備な私に槍を突き立てはしなかった。

「しつかりして、佐倉さん！目を覚まして」

思い切り肩を掴み、名前を呼び続けるが、彼女は反応しない。

がくがくと何度揺らしても反応はかえってこない。

当然だ。私が触れているそれはもう死体なのだから。

「佐倉……さん……」

よく見れば、彼女の家族たちもそうだ。

佐倉さんのお母さんとモモちゃんは、首元に一文字の大きな傷が走っている。他の部分も全身継ぎ接ぎだらけで、まるで壊れたヌイグルミを繋ぎ合わせたかのようなだった。神父の人に至っては使い魔だ。佐倉さんのお父さん本人ですらない。

「なんで……なんでこんな……」

夢だと思いたい。また共に戦おうと誓い合った彼女が、彼女が守ろうとした家族が、こんな目にあっているわけがない。

だが、彼女たちの冷たさが、乾ききった瞳が、これは現実だと突きつける。

「……許さない……」

振り向き様に銃を放つが、魔女の姿は掻き消えてしまう。

(そこっ！)

ヒュツ、という風を切る音がするのとほぼ同時に背後に弾丸を放つ。

が、手応えは無し。横合いから、馬の強力な蹴りを浴びせられる。

骨が折れたような痛みだが、なんとか動ける。

体勢を立て直すと、そこにいるのは3体の魔女の姿。

複数の幻影：・ 佐倉さんと似た能力のようだ。

魔女たちが、私の周りをぐるりと囲む。

左右の魔女に銃をつきつけ、正面の魔女と睨み合う。

訪れる沈黙。

やがて、耐え切れなくなったのか、正面の魔女が動き出す。と、同時に左右の魔女も跳びかかってくる。

だが、引き金はまだ引かない。

魔女の槍が私を貫くまであと2メートル。まだよ

あと1メートル。まだまだ：・

あと50センチ。もう少し

あと5センチ。いまだっ！

両手のマスケット銃を空中へと投げ、空いた両手で正面からの槍をいなす。

隙が出来た魔女の胸部へと蹴りを放ち、そのまま足場にして宙の銃の元へと跳躍する。

そして、掴んだ銃で、2体の魔女を同時に撃ちぬいた。

だが、撃ちぬいた魔女は幻影で、霧が再び魔女の姿を形成する。

腹部に激しい痛みが走り、口から血が垂れる。

先の一撃が響いているようだ。

これでは、ロクに動けそうにない。

3体の魔女が、同時に槍を構えて突撃してくる。

どれが本体かなんて考えている余裕はない。

急いでマスケット銃を精製し、銃を構える。

外せば、その先にあるのは死。

狙いを定め、真ん中の魔女を撃つ。

その姿が掻き消えた瞬間、私は信じられないものを見た。

弾丸は、魔女の身体を貫いていた。

「え…？」

魔法の幻影が全て消える。

残ったのは、動きを止めた一体の魔法だけ。

呆気にとられる私をよそに、魔法が距離を詰めてくる。

だが、その動きは鈍く、今の私でも武器を捌くことができた。

リボンで魔法の身体を拘束し、もう一度弾を撃ちこむ。

決着は、余りにも呆気ないものだった。

「…ねえ」

魔法が答えを返す筈もない。

なのに、私はどうしても聞かなければならなかった。

「どうしてあなたは当たりにきたの？」

避けなかった、ならまだわかる。

でも、この魔法は違う。明らかに、私の弾丸に当たりに来たのだ。

「……………」

魔法と私の立ち位置をもう一度見比べてみる

私と魔法を直線上に結ぶと、そこにあるのはモモちゃんの遺体。

「まさか……」

もし、魔女が私を殺すことを優先したら、本体を捉えられなかった弾丸は彼女たちに当たっていた。

そこから推測すれば、答えは一つ

「彼女たちを……護ったの？」

「……」

魔女の身体が、霧のように大気に溶けていく。

「待って……！」

聞きたいことは山ほどにある。

手を伸ばし、魔女を掴もうとする。

でも、結局それは一足遅くて。

魔女は、グリーンフィールドを残して消え去ってしまった。

「……」

「どうやら、無事に倒せたようだね」

今さらやつてきたキュウベえが、境界から戻ってきた私をいつものように労った。

「…あなた、知っていたの？」

「佐倉杏子のことかい？僕は聞かれなかったから言わなかっただけだよ」

「…そう」

いつもなら、ここでキュウベえを怒れるはずなのに、いまはそんな気すら起きない。

涙すら流せず、ただふらふらと、ぼんやりとした意識で歩いていたらいつの間にか家に辿り着いていた。

ご飯を食べることもお風呂に入ること億劫で、布団を被ることもなく呆然とベッドに寝転んだ。

なんでこの子はモモちゃんを護つたんだろうとグリーンフシードを摘まんでいると、身体は疲れ果てていたのか、いつの間にか私の意識は落ちていた。

\*\*\*\*\*

もういやだ。

パパもママも佐倉さんもモモちゃんたちも、どうしていなくなってしまったの？

どうして、私だけ…

「もういいんだよ」

だれ…？

「もう無理して頑張らなくていいの。どんなに努力したって、あなたの頑張りは全部裏目に出ちゃうもの」

あなたは…小さいころの私？

「あなたが悪いんじゃない。あなたに伝えようとしなくてみんなが悪いのよ。だからこうやって一人だけ取り残されちゃうの」

……

「でも大丈夫。あなたが独りぼっちにならない素敵な方法を見つけてきたよ」

え…？

「理想の世界を作ればいいの」

理想の…世界…？

「理想のみんなは絶対にママを裏切らないの。佐倉さんのお父さんみたいにママを傷付けないし、佐倉さんみたいに一時でも離れようとしない」

…  
楽しそう

「うん、凄く楽しいよ。時間を忘れてみんなで楽しくお茶会をするの」

そう…

私が\*\*になつてしまえば、もうこんな辛い目には…

『マミさん』

佐倉…さん？あれ、小さい私は…？

『…マミさん。あたしは、あなたに迷惑ばかりかけてきたよね。何もかも背負わせて、なに勝手におつ死んでるんだと思つてるかもしれない… 本当にごめん』

そんなことないわ！結局、私はあなたが苦しんでいる時に何も力になれなかった！あなたには悪くない。悪いのは私よ。

『…なら、あたしの最後の我儘を聞いてくれるかな？』

… 我儘？

『あたしは、誰にもこんな目に遭つてほしくない。こんな馬鹿は、あたしだけで十分だ。だから…頼む。あたしなんかの為に死ななくてくれ。そして、こんな目に遭うやつを一人でも多く止めてくれ』

\*\*\*\*\*

目が覚める。

手の中を見ると、そこにあつたのは、握り絞められた私のソウルジエムとグリーンシード。

私のソウルジエムの濁りは、だいぶ消え去っていた。

なにもかもがどうでもいいとごちやごちやになっていた頭の中も、随分と綺麗になっていた。

これは偶然だろうか。それとも…

「…わかったわ、佐倉さん」

夢の中身はなぜかハッキリと覚えている。

もしも、彼女がそれを望むなら

もしも、それが私への罰ならば

私は、全てを受け入れるわ。

数週間後、私は佐倉さんの教会の前に立ち尽くしていた。

「きみも変わったことをするよね。死体は結界に飲まれて消えてしまったというのに。そのうえ、杏子と家族以外にも、あの結界で消えた行方不明者全員のぶんを調査してまで墓をたてるなんてさ。」

まあ、正式に建てられたお墓ではないし、端から見れば名前が書かれただけの十字架だから維持費もかからないだろうけどね」

キュウベえは私の気を損ねないよう言葉を選んでいるけれど、その節々からこの行為の無意味さを唱えているように聞こえた。

この子の言う通り、きっとこの行為そのものはなんの意味もないだろう。

死者の魂を弔うにしても、佐倉さんの家族以外の人たちとはなんの面識もない人ばかりだ。

なんの関わりもない小娘一人に悼まれたところで彼らはさして嬉しく思わないだろう。

それにこのお墓も、誰かがこの教会の土地を買い、新しい建物でも立てればすぐに取り壊されてしまう。

……尤も、例の人食い教会の噂のあるようないわくつきの土地に建物を建てるような物好きがどれだけいるかは知らないが。

だから、意味があるのはこのお墓自体じゃない。

「… キュウベえ。あなたは怒るかもしれないけれど、私は決めたわ」  
「？」

「もう二度と、佐倉さんのようなことは起こさせない。絶対に、なにがなんでも止めてみせる」

これは私たちの犯した罪。

ほんの少しの勇氣を持たなかった私たちの償わなければならない罪の数だ。

「それは、僕が契約するのを防ぐということかい？」

「そういうことになると思うわ」

「… そうかい。なに、好きにするといい。それはきみの行動だから、僕はそれを咎めはしないよ」

「ありがとう」

私はもう迷わない。

あなたとの約束がある限り、私はなんだって耐えられる。

この命が尽きるまで、戦い続ける！

だから… どうか見ていてください、佐倉さん

「ん…」

腕から伝わるテーブルの感触が蘇る。

長い、長い夢から覚めた。

見ていたのはかつての私の記憶。忘れられない、彼女との約束。

「…起きたわね」

頭上から声がかかる。

顔を上げると、私を見下ろしていた長い黒髪の少女——暁美ほむらが私を見下ろしていた。

「暁美さん…？」

彼女と出会ったのは三週間くらい前のことだった。

彼女はキュウベえを襲い、素質のある一般人である鹿目まどかと美樹さやかとの接触を止めようとしていた。

キュウベえを襲っていたのには少しカチンときたが、しかし思惑はどうあれ魔法少女を増やしたくないという点においては目的は一致していた。

そこで、まずは彼女と話をする為に、鹿目さんたちに魔法少女について教えるので一

緒に来て欲しいと持ち掛けると、意外にもすんなりと承諾。

家でお茶菓子を振舞いながら、安易な気持ちで契約なんて絶対にしてはいけないことを二人に教えると、暁美さんはそれを補強するかのように絶対に契約をしてはいけないと念押しした。

その様子から、私は暁美さんも佐倉さんのように他者の為に願ってしまったのではと推測。

鹿目さんたちを帰した後、私は答えてくれるまでは返さないと暁美さんに粘りに粘って詰め寄った結果、彼女は大まかではあるが渋々答えてくれた。

結果は推測通り。

彼女もまた、誰かの為に祈ってしまったのだ。…尤も、守りたかった人は既に亡くなっている。そして、これ以上キユウベえと契約させないでと約束した為に鹿目さんたちを遠ざけようとしたのだった。

まさに奇跡だった。

一点どころか目的がここまで相似していたなんて。

私はすぐに協力を持ち掛けた。すると暁美さんもそれに即座に承諾。

こうして無事に私と暁美さんの同盟は締結され、現在に至るのだった。

「ごめんなさい、予定していた時間よりも早く着いてはいたのだけれど、起こすのも悪いかと思って…」

「私のほうこそごめんなさい。打ち合わせで呼んだのは私なのに、居眠りしていたなんて」

「気にしていないわ。ただ、鍵を開けっ放しにしておくのは関心できないわね。万が一のことというのものもあるものよ」

「…反省するわ」

そして、テーブルに晝美さんが持ってきた地図が広げられ、私たちの作戦会議が始まった。

この街を襲う最大の脅威、『ワルプルギスの夜』を超える為に――。

## 【現在】

## 最後に残った道しるべ①

カチ、カチ、と時計の針は時を刻む。

『暁美ほむらが時間を撒き戻すほどまどかは強い魔女になる』

私は、先ほどキュウベえから聞かされた真実について想いを馳せていた。

思い当たるべき機会はいくらでもあった。

けれど、迂闊な私は気づけなかった。ほんとは、気づかないようにしていたのかもしれない。

まどかを救おうと願った想いが世界の破滅へと爪を立てていた——それだけならば、ここまで引きずることはなかっただろう。

まどかが最強の魔女になるという素質があるとして、それが意味を為すのは契約した時だけ。契約さえさせなければその最悪の魔女は姿を見せることはないのだから。

しかし、キュウベえは最悪の仮説を私に押し付けてきた。

『このまま時間遡航を続けていけば、いずれ鹿目まどかという存在は消えてしまう』

私が束ねてしまった平衡世界の因果線を空気、まどかという存在を風船に例えて。

果たして風船に空気は無限に入るかどうか。答えはN O。そんなもの幼稚園児にもわかる話だ。

無論、あくまでも推測にしかすぎない。本当はもつと複雑なものと同異常が重なり合った結果なのかもしれない。

しかし、私はいつの推測を否定できるだけの材料は持っていないかった。

もしも推測が正しいのなら、あとどれだけかという器は耐えられるのだろう。

100回巻き戻してもまだ耐えられるのかもしれない。あるいはその逆で、もう一度巻き戻した途端に器が壊れて彼女は消えてしまうかもしれない。

もう、時間は巻き戻せない。

この時間軸の佐倉杏子は既に死んでいる。

彼女という強大な戦力がいないのは非常に心許ない。

純粹に数の面でも不安だ。

ワルプルギスの夜はヤツ本体の強さもそうだが、並の魔女とは比較にならない強さ且つ数の使い魔を用している。

ヤツラを私とバママの二人で迎撃する。それがどれだけ困難な道か、考えたくもない。

けれど悪いことばかりじゃない。

この時間軸のバマミは、私の知る中で最も強い。

いつもの優雅さや可憐さは一切ナリを潜め、淡々と、より効率よく正確に敵を倒すだけの戦い。

その為、戦闘のほとんどは彼女主体でこなし、私は軽く補佐をする程度だった。

薔薇の魔女も。相性が最悪のお菓子魔女も。彼女はほぼ単騎で圧倒してしまった。

きつと単純な戦闘力であれば私はおろか佐倉杏子でも敵わないと思う。

なにより、彼女は佐倉杏子の件により、まどかと美樹さやかとの契約を断固として許さなかった。

その点は彼女に非常に助けられていた。

そしてまどかと美樹さやか。

彼女たちはここに至るまで契約をしなかった。

バマミと共に再三の警告をしたのもそうだが、極めつけは、彼女が語った佐倉杏子の件だった。

彼女たちからすれば知らぬ存在だが、他者の為に祈った彼女の絶望は、二人に契約を思い留まらせるには充分だった。

ワルプルギスの夜への戦力になりたいという二人の懇願はめつきり消え、代わりにプ

ライブートでの交流が増えた。

魔法少女関係なしの放課後の誘いだったり、みんなでママの家でお泊り会をしたり。魔法少女じゃなくても傍にいたい。力になりたい。友達でいたい。

そんな彼女たちの心遣いが嬉しかった。それはママも同じだったようで、涙ぐみながら三人纏めて抱き着かれた時には、二人は朗らかに笑い、私も照れくささで頬が紅潮してしまった。

思い返せば、この時間軸はいつ以来かの充実した時間軸だった。

ママという頼れる魔法少女仲間がいて。魔法少女でなくとも親身になってくれるまどかとさやかがいる。

あと一人、佐倉杏子さえ揃っていれば万全だったのだが……

……いなくなってしまうた人のことを嘆いている余裕はない。

彼女には悪いが、私はこの時間軸をやり直すつもりはない。

ワルプルギスの夜は二人で倒す。まどかも絶対に契約させない。私たちは勝つ。勝って、未来へと進む。

決意と共に、私は机に置いてある携帯電話を掴み上げた。

「……」

私の掌の中のグリーンフシード。

かつて、教会にいた魔女を倒して手に入れたものの、未だ使い切ることのできなかったものだ。

魔女は倒さなければならぬ存在だ。けれど、あの魔女にだけはなぜか敵意を向けることができなかった。

あんな凄惨な事件を引き起こしたのは事実だけれど、それでも佐倉さんの家族を護つたあの姿を忘れることはできないからだ。

「…… ついに、この時がきたのね」

暁美さんのあれだけ強力な魔法を使っても倒せず、更には幾多の歴史を滅ぼしてきた伝説の魔女。

勝てるだろうか？ いや、勝つしかない。

さんざん生にしがみついていたが、その命を燃やす時がきたのだから。

「でも…… もしも。もしも、私たちの力が及ばなかったら……」

右手に持つ、かつて佐倉さんたちを守っていたグリーンフシードに問いかける。

当然、返答などあるはずもなく。

だから、私は私の思ったようにこの子に力を貸してもらおう。

(どうか見守っていて。優しいあの子どもたちが救われるように…。なんて、魔法少女が魔法に頼むようなことではないのでしょうか?)

私はグリーンフシードにヒモを付け、飛ばされないように首にかけ、部屋を後にした。

---

ワルプルギスの夜襲来 当日。

避難所で私たちは集まり、各々の行動の最終確認をとっていた。

「それじゃあ、行ってくるわ」

「いい? なにがあっても落ち着いて行動すること。事情を知ってるのはあなたたちだけなんだから」

「は、はいっ」

「大丈夫、二人のこと信じるからさ」

緊張でガチガチのわたしと違って、さやかちゃんは朗らかな笑顔で激励をかけていた。

これを最後にするつもりなんてないんだから、さやかちゃんみたいに笑って送り出さ

なきやいけないのに、臆病なわたしにはどうしてもそれが出来なかった。

「ほむらちゃん、ママさん。恐くなったら、辛くなったら逃げてもいい。だから…絶対生きて帰ってきて」

だから、わたしにはこんなことを言うのが精いっぱい、それでもママさんとほむらちゃんは微笑み頷き返してくれた。

二人が去っていくのを見届けると、さやかちゃんがわたしの肩に手を置いた。

「さっ、まどか。お互いひとまずは家族のところに戻る」

「…うん」

力なく頷き踵を返した時だった。

「その前に少しいいかい？」

突如、足元から声がした。

キユウベえがいつの間にか、わたしたちの足元に姿を現していた。

「ツ…なにしに來たのさ」

さつきまで笑みさえ見せていたさやかちゃんの顔が強張り、敵を見るような眼で睨んでいた。

さやかちゃん、どうしたのかな？

「現状の確認さ。君たちにも今の状況を把握してもらいたいからね」

そんなさやかちゃんの視線など気にも留めず、キュウベえはつらつらと言葉を紡いでいく。

「マミは歴戦の魔法少女だ。僕の見た限りでは、彼女には及ばずとも暁美ほむらも充分に強者といえるだろう。」

けれど、それだけの戦力でワルプルギスの夜を倒せると思うかい？ その程度の魔法少女が、今までに伝承として多くの魔法少女に語り継がれると思うかい？」

「…二人には、勝ち目がないの？」

わたしが不安げに問いかけると、キュウベえは目を瞑りながら答える。

「0ではないかもしれない。ただ、勝算を大雑把に見積もるなら、1%にも満たないだろうね」

「そんな…！」

勉強が得意じゃないわたしでもわかる。1%以下の勝率というものがどれだけ絶望的かなんて。

「けれど、きみが契約してくれればそれだけで勝率が跳ね上がる。いや、確実に勝てると言っても過言ではない。まどか。マミたちを助けたいなら、僕と契約するべきだと思う。でないとな彼女たちは——」

「まどか、耳を貸さないで！」

キユウベえが契約を持ち掛けてきたところで、さやかちゃんが怒鳴り声を遮った。

「さやかちゃん…」

「マミさんに言われたでしょ。契約はどうしようもなくなってようやくするものだった。それに、1%でもなんでも、勝機があるなら絶対に掴み取ってくれる。それがあの二人でしょ」

力強く断言するさやかちゃんを見て、改めて思う。

そうだ、マミさんたちはわたしたちや町の人達を護るために戦うんだ。だったら、わたしたちが信じなくちゃいけない。

それがきつとマミさんたちを支えるっていうことなんだと思う。

「… うん、わかってる。ただ、少し不安になっちゃっただけ」

「ならよしっ… 不安なのはあたしも同じさ。だからこそ、二人を信じないとね」  
「…」

話を打ち切り、しっしと手で払うジャスチャーをするさやかちゃんをキユウベえはジツと見つめている。

「… 理解できないなあ」

やがて、ポツリとそう言葉を漏らした。

「先ほどから君達は二言目には信用だの信頼だのと口にするけれど、それになんの意味があるんだい？」

「… なによ。喧嘩売ってるの」

「僕はただ率直な考えを述べているだけさ。信頼や信用に殉じたところで、死んでしまえばなんの意味もなさない。でも、二人が契約して共に戦えばそんな不確かなものよりも確実に彼女たちを救うことが出来る」

受け流していた先ほどとは違い、キュウベえはさやかちゃんの怒りに反論するかのよう  
うに持論を述べていく。

「少し厳しい言い方になってしまったかな。でも、きみの契約は今の状況を打破するには一番効率がいいということは忠告しておきたかったんだ」

そこでようやくやくキュウベえの言葉が途切れた。わたしはそんなキュウベえをらしくないと思った。

いつもだったら契約を迫るにしても、それはあくまでも選択肢の一つ、という程度に収めていた。

でも、今回は違う。契約しないことのデメリットばかり挙げて、私から見ても半ば強制的に契約を結ぼうとしている。

どうしてだろう。

その答えを知る前に、雷が甲高く響き渡った。

「もうすぐ来るわ。気を引き締めて」

「ええ。… 暁美さん、少しいいかしら」

魔力の気配が濃くなり、あと数分もすれば出てくるだろうというところまできて、急にマミは語り始めた。

「今までの私の戦いは、両親を、佐倉さんたちを見殺しにしてしまった償いのための責務だった。彼女の父親を撃つてしまった償いだった。だから、漠然とした誰かを守ったところでそれを誇りになんて思えなかった。

でもね、私なんかのために涙を流してくれた鹿目さん、自分の気持ちを素直に伝えてくれる美樹さん。そして、隣に立って支えてくれるあなた。

私ね、自分の意思であなただちを守りたいと思えた。魔法少女としての義務じゃなく、償いでもなく、あなた達だから守りたいんだって、初めて思えたの。だから…。」

「巴さん。いまそういう台詞は縁起が悪いわよ」

聞いてて耳が熱くなっていくのがわかった。

感謝してくれているのは嬉しく思う。けれど、この状況であるバマミに言われるのが妙に照れくさかった。

だから無理やり遮った。このままだと映画なんかでよく見る死亡フラグまっしぐらだったのもなにか嫌だった。

「…そうね。ふふっ。暁美さん、顔、赤いわよ」

「き、気のせいよ」

「そう、気のせいね」

誤魔化したけど絶対にバレているわねこれ。でも嬉しさと恥ずかしさは紙一重だから仕方ない。

「…暁美さん、絶対に勝つわよ」

「ええ。その為に、私はここにいる」

だから、続きはこの戦いを終えてからだ。

「ウフフ…アーハハハハ!!」

そして奴は甲高い笑い声と共に姿を現した。

最強の魔女、ワルプルギスの夜。

奴との最後の戦いが幕を開けた。

## 最後に残った道しるべ②

「ツ… 凄い圧力ね。流石は伝説の魔女といったところかしら」

初めての邂逅に多少面食らっていたものの、やはりというべきか、動揺や恐怖はほとんど抱いていないようだ。

さすがに経験値が経験値だけに非常に頼もしい。これなら問題なく作戦を実行できる。

「手筈どおりに。まずは私から行くわ」

「お願い、暁美さん」

時間を停止し、私だけが動ける時間の中でありつただけの銃火器を盾から召喚し片っ端から弾を発射する。

その全てが一定の距離をおいて静止し、ワルプルギスを取り囲む。

時間停止、解除。

動き出した砲弾は一齐にワルプルギスへと襲い掛かり、被弾し爆発を起こす。

もしもこれを一個人、あるいは魔女に向ければ数秒と経たず肉体ごと滅ぼせるだろう

う。

だが、あのワルプルギスの夜にはさほど通用しない。

単純にサイズが大きいのもあるが、これまでの統計上、あの魔女は単なる物理攻撃が通じにくい性質を有しているようだった。

私の大量の武器はあくまでもその物理攻撃の範囲にある。

故に、ワルプルギスへの有効打にはなりえない。

私の攻撃は精精、足止めがいいところだ。

「はあっ！」

ママが大筒を構え、引き金を引く。

本命はママの高火力の攻撃。一度では斃せずとも、何度も当て続ければ効果があるはずだ。

「アーツハハハハ!!!」

ママの大筒を受けたというのに、奴は依然変わらず笑い声を止めることはない。

「あの様だと、手ごたえがわからないわね」

「関係ないわ…。このまま押し切る！」

出し惜しみなんてしている暇はない。全てを使い切る勢いで武器を取り出していく。

「キャハハハ！」

「ッ！」

爆煙を掻き分け、使い魔が放った紫色の矢が迫ってくる。かわしきれないと判断した私は、咄嗟に防御の姿勢をとった。

「曉美さん！」

矢が私に触れる寸前に、バマミのリボンが割って入り被弾を防いだ。

「助かったわ」

「まずはあたりの使い魔から蹴散らしていきましょう。それが避難所の守りにも繋がるわ」

「ええ。邪魔よあなたたち」

沸いて出てくる使い魔たちを機関銃で一掃する。

その弾幕を避け、私へと迫る攻撃はバマミのリボンとマスクットが阻み、私達へのダメージを極限まで減らす。

この一連の流れさえ掴み、大きな失敗を犯さなければ、私達が使い魔に遅れをとることはない。

けれど、ただ私達が生き残るだけでは意味が無い。

まだか達や町の人たちのいる避難所を守りきらねば私達の敗北だ。

それはマミも理解している。だったら、私達のすべきことはひとつ。

周囲の使い魔を散らしきった私達は互いに背中合わせになり死角を潰した。

「このままではキリがないわ」

「そうね。なら、もう守りに入る時間は終わらせてもいいんじゃない？」

「このまま粘ったところでワルプルギスへと届かない」

「ええ。だから、あなたの背中には私に任せて」

「……わかったわ。あなたの背中には私が守る」

ここからは、私達の攻撃だ。

マミのマスクットと私のベレッタが同時に火を吹き、私達は弾かれるように走り出す。

互いに、群がる使い魔たちを撃ち、打ち、討ちのめしていく。

使い魔の牽制攻撃などはこの際無視だ。多少の被弾は覚悟でつつきり、とにかく使い魔を少しでも多く散らしていく。

どれほど使い魔を消しただろうか。

気がつけば、ワルプルギス本体は眼前だった。

予想以上に迫りつくのが早かったが、一人ではこうはいかなかっただろう。

背中をあの巴マミが守ってくれている。

だからこそ、自分はこちらまでできたのだ。

「アーハハハハ！」

「暁美さん！」

ワルプルギスが吐いた炎は、送れて合流したマミのリボンの盾が表面を滑らせ防いだ。

「ごめんなさい、少し遅れたわ！」

そういうマミの身体にはほとんど傷がついていない。被弾覚悟で突破した私とは大違いだ。

やはり戦闘センスの差があるのだろう。そこに若干の歯がゆさを覚えるものの、すぐに気を引き締めなおす。

「ここまで近づいたらもうやりたい放題ね。さあ、ありつたけの攻撃をぶつけてやりましょう」

「ええ」

——時間停止。

秒時計のことを考えればもうあと何回使えるかわからない。

持続時間は30秒もない。ただし、この30秒間を動けるのは私とリボンで繋がれているマミだけだ。

私は機関銃を撃ち、マミは大量のマスケットを同時発射する。

残り20秒。

私が大量の手榴弾を盾から放り、マミのリボンは1個たりとも余すことなくピンを抜く。

残り10秒。

魔力を通したタンクローリーを半ばヤケ気味に放り、マミは大筒の充填を始めた。

5秒前。

マミのリボンの盾が私の眼前に張られた。

4秒前。

大筒の充填が終わったようだ。

3秒前。

大砲が放たれた。あれは相当な威力だろう。

2秒前。

マミが私の隣に並び、共にリボンの盾に身を隠す。

1秒前。

来る衝撃に備え、共に歯を食いしばる。

0。

激しい衝撃と共に、私達はリボンもろとも投げ出され、爆煙に捲かれながら地上へと投げ出された。

落下する最中、盾になっていたリボンが私達を取り囲み、球体状になって私達を包み込んだ。

これなら落下時の衝撃を殺せる……はず。

リボンの球は、地面に触れるやいなや、大きくバウンドし、一昔前のピンボールのように何度も激しく跳ねまわり、衝撃が10を超えたあたりでようやく動きを止めた。

リボンの球が解かれ、マミは思わずしりもちをつき、私はふらふらと地面に横たわってしまった。

(う……吐きそう)

「大丈夫？」

「や……やったのかしら」

「そう思いたいけれどね」

マミがそう呟くのとほぼ同時。

「アーハハハハハ!!」

爆煙を吹き飛ばし、姿を見せたあいつは健在だった。

けれど、確かにダメージは残せたみたいで、あいつの飛び方はフラフラとした不規則なものになっている。

その上、身体の一部に弾が入り、いまでもポロポロとその欠片を落としている。

「立って暁美さん。この調子でガンガン行くわよ」

「え、ええ」

弱った身体に鞭をうち再び跳躍する。

それでも、今までの戦いに比べれば、私はまだ比較的余裕がある。

マミはまだまだいけそうだ。

「巴さん」

「わかっているわ。ワルプルギスは私達を認識できていない…。今がチャンスね」

マミのリボンが大砲を象り、魔力が充填されていく。

今までの短時間のタメの比じゃない。恐らく今までで最大の一撃をお見舞いするつもりだ。

あれが当たれば、如何にワルプルギスでも耐え切れないだろう。

「キャハッ」

しかし、ワルプルギス本体が気づいていなくても、使い魔は別だ。

いま攻撃を受ければ、如何に巴マミでも集中力が削がれ大砲が撃てなくなるかもしれ

ない。

それを防ぐのが私の役目だ。

いくら消耗していても、使い魔相手にもたないわけではない。

「頼んだわ、暁美さん」

「ええ」

両手の拳銃で使い魔を蹴散らしつつ、マミからつかず離れずの距離を保ち、彼女の周囲を護衛する。

（いけるかもしれない）

初めてかもしれない。まどかも美樹さやかも契約しておらず、マミと私の二人だけで

ここまで戦えたのは。

ここまで彼女と噛み合っているのは。

「気づかれた!」

「大丈夫、私の方が先よ!とびっきりのをお見舞いしてあげるから」

「なら頼んだわ」

「ええ」

私が笑みを携えながら言うのと、マミも力強く答えた。

(あれ…、なんで私、笑って…)

戦いの最中、それもこんな重要な局面で。

『クラスのみんなには内緒だよっ』

『いくわよ鹿目さん!』

頭の中に、彼女達との出会いが過ぎる。

… ああ、そうか。いまさらになってわかった。ここにきてようやくわかった。

わたしはまどかを救うために契約したけれど、その根底には。

私は彼女とも並びたかったんだ。

まどかと共に私を助けてくれたあの人にも認めてもらいたかったんだ。

認めてもらいたかった人たちと、その先へ進みたかったんだ。

「勝ちましょう、巴さん」

だから、あの人とこんなにもかみ合うことが、嬉しいんだ。

「キャハハハ」

右側頭部に痛みが走り、無様に地面を嘗める。

吐き気と共に見つめる地面がぐるぐると渦巻き立ち上がることすらままならない。

反応が遅れた。咄嗟の防御も間に合わなかった。

念願の勝利を目前に気が緩んだとでもいうのだろうか。

繰り返してきた時の中で、それほどまでに私の心は疲弊しきっていたとでもいうのか。

「曉美さ……！」

「かま、わないで」

必死に声を絞り出しマミを制する。

声が届いたかはわからないが、彼女は再びワルプルギスへと視線を戻したような気がする。おそろく伝わったのだろう。

きつと伝わっているはずだ。

ゴゴゴ

おぞましい轟音と共に、巨大な黒い塊が迫ってくる。

視界がぐるぐるとしているため正確にはわからないが、恐らく巨大なビルだろう。

このままでは潰される。そう思い盾に手をかけるが——動かさない。

(時間、切れ)

砂時計は尽きていた。もう私にビルから逃れる手段はない。

死が迫る中、全ての光景がスローに見え、思考までも冷静になった。

私はここで死ぬ。けれど、ママが引き金を引けば、ワルプルギスに勝てるのだ。

それに、私がいなくても、ママがまどかたちを魔法少女に勧誘することはない。

ならばもう思い残すことはない。

どの道、自分のような多くのものを壊してきた女が、正しい道をいく彼女達の隣に立つなどあつてはならなかったのだから。

瞼を閉じ、その迫る死を受け入れようとした。

暗闇の中で、けたましい轟音が響いた、気がした。

☆

「……どうやら決着がついたようだね」

徐にキュウベえが告げた。

「えっ」

「本当!?」

「ああ。勝利したのは…」

## 最後に残った道しるべ③

☆

「う…」

全身が痛む。頭痛と共に吐き気を催す。

てつきり死んだと思ったが、響き渡るあの聞きなれたやかましい笑い声が、現実であることを証明してくれた。

(助かった…？運がよかったのかしら)

とはいえ安堵している暇はない。すぐにあいつの、ワルプルギスのもとに行かなくて  
は。

(まって…なぜあいつはあんなにもピンピンしているの?)

ママのあの大砲を受ければ、倒せずとも深手を負わせることはできたはずだ。

だが、あいつが弱った気配はない。いったいなぜ…

その答えは、すぐに思い知らされることになる。

—— パァン。

銃声が響いた。

私は思わず音の出所に目を向けた。

ママだ。彼女が、私に背を向け立っていた。

「田ヤ…」

言葉に出そうとして気がつく。

彼女の衣服は至るところが破れ、綺麗だった肌には数多の傷が刻まれていたこと。周  
 囲に、使い魔が群がっていること。彼女の足元には夥しいほどの血が流れていたこと。

私は彼女のもとへと駆け寄ろうとする——が、動けない。

瓦礫だ。巨大な瓦礫が、私の右足を押しつぶしていたのだ。

「!!」

己の惨状を認識したことで、痛覚が蘇り、言葉にならない激痛が身体を駆け巡る。

あまりの衝撃に意識が飛びかけるが、しかし、気絶なんてしてる場合じゃない。  
 行かなくては。彼女がいなければ、ワルプルギスの夜は倒せない。

どれだけ足を引っ張っても瓦礫から抜ける気配はない。

拳銃で援護しようにも、使い切ったのかどこかにばら撒かれてしまったのか、盾の中  
 はもう空だ。

いまここにいる私が、彼女の為にできることなどなにもない。こうしている間にも彼

女は私を守る為に傷ついている。

早く行くんだ。脚が邪魔しているのなら、こんな脚なんて必要ない。

落ちていたガラス片を拾い、脚を斬りつける。

もちろん、包丁やハサミですらないコレであつさり切り離せるはずも無い。

何度も、何度も振り下ろし肉を、繊維を、骨を削っていく。

感じる痛みなんて遮断する。そんなものを気にかける暇など無い。

——背後から幾度も鈍い音がする。

手を止める暇も振り返る暇もないが、ママが飛ばれているのだろう。

蹴られ、殴られ、撃たれ、焼かれ、刺され。

それでもいま私がガラスを振り下ろしていられるのは、彼女が耐えているからだろ  
う。

私を守る為に、私を救うために使ってしまった残り少ない魔力を支えに。

彼女が、使い魔にあんなにも一方的に飛ばれるはずがない。

ワルプルギスの夜が、あの技を受けてあんなにも平然としていられるはずがない。

私の怪我が、この程度で済んでいるはずがない。

…そう。語られなくてもわかる。彼女は、大砲をワルプルギスに撃たなかったの

だ。

私を救うために。私の即死を防ぐために、彼女はビルを撃ち私への直撃を逸らしたのだ。

どうして。絶対に勝つと約束したのに！私なんか、放っておいてよかったのに！

私の右足は、もう肉も骨も見えるほどに、ドロドロのめちやくちやになっていた。

これでいい。これでようやくあの人のもとへと駆けつけられる。

躊躇うことなく、最後の一回を振り下ろした。

ぶちぶちと残っていた筋繊維が切れ、右足が剥がれていく。

待っていて、マミ。私が戦うから。隣に立つから。

私は大丈夫だって伝えるから。いつも強がっていたあなたの代わりに、今度は私が強がるから。

無様でも、逃げてもいい。あの子達と生きて。

あなたは絶対に——死なせはしない！！

振り返った時、ブチリ、と音がした。

あの人の身体が上下の二つに別れて、使い魔たちは新しい玩具を手に入れた子供のよう  
うにけたけた笑い、彼女をさらに細かく切り裂いた。

残された希望は、あまりにも呆気なく折られてしまった。

## 最後に残った道しるべ④

・ ・ ・ ・ ・  
数日前の夜のこと。

「まどかが契約しないように見張ってほしい」

突如、あたしの家にやってきたほむらは開口一番そう告げた。

あらかじめ電話があつたからいいものの、今は午前1時。

両親は寝てるので窓から入れたが、そんな当たり前のことを伝えに来たのだろうか。

「はつきり言わせてもらうけど、私たちの勝算はかなり低いとみてもらっていいわ」

そしていきなりの弱きな発言。いや、それをいまこのタイミングで言っちゃやう？

「勘違いしないで欲しいのは、私たちは決して負けるつもりはないということ。もし追いつめられて契約するとしても、それは私たちが倒れてからにしてほしいということよ」

「えーっと、それはつまりどういうこと？」

「あなたたち、私たちが劣勢だと助ける為に契約してしまうでしょう」

「ギクリと身体が跳ねてしまう。契約することは念頭に置いていないけれど、もしもほむら達が追いつめられたら契約する姿はありありと想像できたからだ。」

「ん……まあ、わかったわ。じゃあまどかにもそのこと釘刺しておけばいいんだね」

「いいえ。彼女には知らせないで欲しい」

「へ？」

「彼女の契約はもはや私たちだけの問題じゃなくなっているの。そうでしょ、インキュベーター」

「そうだね。彼女の素質はもはや世界に影響を与えられるレベルにまでなっている」

「いつの間にか現れていたキュウベエをほむらが睨みつけた。」

「……いつも思うが、この二人はやけに互いを敵視しあっている気がする。」

「ねえ、その素質がどうかかって話で、なんでまどかには話しちやいけないって繋がるの？」

率直に抱いた疑問を投げかけると、ほむらは躊躇うような面持ちで目を逸らし俯いた。

そんなに言いにくいなら言わなくてもいいと言いたるところだけれど、流石にこんな時間に家を訪ねられて隠されましたじやあたしも納得できない。

あたしは待った。ほむらが話してくれるまで、じつと見つめ続けた。

やがて、ほむらは腹を括ったかのようにあたしを真つすぐに見つめて口を開いた。

「これから話すのは、ソウルジエムの真実よ」

ほむらの語ってくれた話は信じがたいものだった。

ほむらはまだかを助ける為に時間を繰り返してきたこと。もう時間を撒き戻せないかもしれない瀬戸際にまできていること。

そして、魔法少女と魔女の隠された真実。

その衝撃的で膨大な情報はあたしの頭をパンク寸前にさせていた。

ただ、ハッキリしていることがひとつ。あたしは足元に手を伸ばし、こちらを見上げているキュウベえの首根っこを掴み睨みつけた。

「あんたが全部の元凶だったわけね……！」

キュウベえは魔女を生み出す。この話が本当ならば、この世界に魔女なんてものがないのも。

ママさんが杏子って子のお父さんを殺す羽目になったのも。

ほむらが何度も時間を繰り返して苦しみ続けているのも。

全てがキュウベエの仕業ということになる。

「魔女を産み出している点は否定しない」

あたしの睨みも全く意に介していないのか、キュウベエはいつもと変わらない表情のまま淡々と告げる。

「けれど、そこから生じる事象の責任を僕らに求めるのは理不尽だ。杏子の父親が精神を病んだのはほとんど魔女が関わりのないことだし、ママも彼を撃たなければ殺すことはなかった。

ほむらにしてもそう。繰り返すのは自分の意思で、僕らは誘発も強制もしていない。だれの責任があるかと問われれば、それは僕らではなくきみたちだと思うよ」

「コイツ… ツ！」

否定してくればよかった。そうすればほむらの勘違いの可能性もあったのに。

でもこれで判明してしまった。ほむらが話してくれたのは真実だつてことを。

キュウベエを締め上げる力を強めようとしたあたしにほむらがそつと腕を添えて止めさせる。

「コイツに怒りをぶつけたところで無駄よ。コイツと私たちでは価値観が違いすぎる。コイツの言葉は重要な情報だけを受け入れるようにしておきなさい」

「くっ…」

発散しきれない苛立ちと共にキュウベえを放り捨てる。

以前までは可愛らしいと思っていたその風貌も、いまや無表情さも相まって不気味さしか感じられない。

「…このこと、ママさんは知ってるの？」

「いいえ。彼女に知らせるのは酷でしょう」

あたしは胸をなでおろす。

ママさんは魔法少女になってからずっと魔女と戦ってきた。それはそのまま、魔法少女を殺してきたということ。

つまり佐倉杏子もその中に含まれている可能性は非常に高い。

もしもそうなら、ママさんはそれを知った時、きつと壊れてしまう。

ただでさえギリギリの瀬戸際だった心が、二度と戻らなくなってしまうかもしれない。

知らない方がいいこともあるということはどういうことなのだろう。

そしてほむらがまどかに話すなどいうのもなんとなく理解できる。

あの子は自分よりも他人を優先してしまう癖がある。

もしもこの真実を知れば、ほむらとマミさんを人間に戻す代わりに自分が魔法少女になるとでも言いかねない。

だから、まどかには契約をしないで欲しいという懇願で収めておいた方がむしろ都合がいいのだ。

そうすると残る疑問はひとつ。

「……ねえ、あたしにだけ知らせたってことはさ。最悪の場合はまどかじゃなくてあたしに契約しろってこと？」

「……」

ほむらは俯き視線を逸らす。

ほむらが言い出せなかったのはこのことだろう。

当然だ。自分の願いを叶える為に、命を差し出せと言っているようなものなのだから。

「……ごめんなさい」

ポツリと呟くと、ほむらの纏う空気は瞬く間に陰鬱なものになっていく。

——さやかは私を恨んでいる。当然だ。いざという時はまどかの為に死ねというのだから。

それでも私はまどかを優先すると決めた。巻き戻せないこの時間軸をまどかに捧げると決めた。

だから私は彼女からどれだけ恨まれようとも構わない。

(.:) なんて思ってるんだろうねこの子は)

まったく、転校してきた時は訳の分からない奴だと思っていたのにいまじゃこんなにわかりやすくなっちゃって。

振り返ってみれば、この子も随分と馴染めたんだなと感慨に浸ってしまう。

「わかった。引き受けるよ」

だからあたしは笑顔で引き受けて。

おそるおそる顔をあげたほむらはあたしの笑顔を見て呆けていた。

「なに驚いてるのよ。そんなにあたしが渋ると思った？」

「でも..」

「心配しなさんな。むしろあたしは喜んでるんだからさ」

確かにほむらは優先順位をつけてるのかもしれない。

けれど、ただまどかを優先するのではなく、あたしを信じてくれるからこそこんな話を持ち掛けた、と捉えることもできる。

魔法少女じゃなくてもほむら達の役に立てるんだと思うとたまらなく嬉しいと思っ

てしまう。

「まどかのごことはあたしに任せなよ。あんたはとにかくママさんと一緒に思い切りぶつかってくればいい」

「さやか」

「勝つよ。あたしたち四人で、ね」

待つことだつて戦いだ。どれだけ甘い誘惑に誘われようともあたし達は絶対に契約しない。

その意思を伝えた時、ほむらは下唇を噛み締め、やがて寂し気な、けれど安心したような微笑みをあたしに向けた。

．．．

ママさんとほむらが負けた。

そう聞かされたあたし達は、いてもたつてもいられず、弾けるように避難所を飛び出

した。

「はあつ、はあつ」

「まどか。早く契約するべきだ。彼女達はもう」

「うるさいっ！信じるもんか、マミさん達が負ける筈が無い！」

肩に乗り囁いてくるキュウベエを振り払うように怒鳴り散らす。

そう。あたし達は簡単に信じちゃいけない。きつと、マミさん達は苦戦しているだけだ。

それをこいつは誇張して伝えているだけだ。まどかをなんとしてでも契約させるために。

だから、マミさん達が無事なのをまどかと一緒に確認しなくちゃいけない。

確認して、二人は必ず勝つと信じ続けなければいけない。

「僕は嘘はつかないよ。現に、ワルプルギスの夜はあんなにも元気じゃないか」

「だから、この眼で見ないと…っ！」

キュウベエの案内に従って走り、見つけた。

あんなにも綺麗だった脚が血まみれで、片方はなくなっている。

白かった肌はドス黒い赤に染まっただけ。身体なんて原型が半分程度しか残ってい

ない有様の友達を——曉美ほむらを。

「ほ、ほむらちゃん!!」

まどかが叫び、駆け寄っていく。

真つ白になりかけた頭も、まどかの声で現実に取り戻された。

それで少し遅れたお陰で気がつけた。

駆け寄るまどかの横合いから、使い魔が飛び掛ってきていたことを。

あたしは無意識のうちにバットを振るつた。

まどかに当たらず使い魔だけに当たったのは幸運としか言いようが無い。

一瞬だけ怯んだ使い魔を押さえ込む為にあたしは飛びついた。

「さやかちゃん…」

「行ってまどか! ほむらのところに!」

あたしたちはごろごろと転がり落ちていく。

まどかがほむらのもとへ行ってくれるかはわからない。

けど、それを確かめる暇は無い。少しでも眼を逸らせばきつとこの使い魔に殺され

る。

「あああああ!!」

バットをがむしやらに振り下ろし、使い魔の頭を殴りつける。

もう一撃、と振り下ろしたところで使い魔の腕が間に挟まりバットを掴まれる。

あたしは咄嗟にバットを放し、持ってきていた鞆に乱暴に両手を突っ込み、2本の金づちを左右の手に握りしめ、使い魔の頭を殴りつけた。

たぶん普通の人間なら重傷になるくらい絶え間なく、何度も何度も殴り続ける。

効いているのか——いや、魔法少女じゃないあたしの攻撃なんて効いているはずも無い。

使い魔がそつと手を添え、ちよん、と押し出す。

たったそれだけのことであたしは金づちもろとも吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

あたしの呻き声があがると同時、使い魔はあたしに跨り首を絞め始めた。

今まで感じたことのないほどの凄まじい圧迫感が首を襲う。

かと思えば、使い魔はあつさり首を離し、代わりにあたしをサッカーボールみたい蹴りはじめた。

骨が軋み、肺に溜まっていた空気を吐き出させられ、吐しゃ物まで溢れてきて。

それでも使い魔には関係ない。まるで赤ん坊に振り回される玩具のように、身体の色んな箇所から音を出され、振り回され、壊されていく。

朦朧とする意識の中で、あたしは呼んだ。

憎たらしいあいつを。全ての元凶のあいつを。

「どうしたんだいさやか」

どうしたもこうしたもない。

あたしがこいつを呼ぶとしたら理由なんてひとつしかない。

『あたし…魔法少女に…！』

(ごめん、ママさん、ほむら)

わかっている。

契約することがママさんへの裏切りになることは。

でも、あたしの願いで二人を治してワルプルギスの夜に挑めば勝機はあるかもしれない。

ママさんからどれだけ責められようとも、皆が死んでしまう最悪よりはマシだ。

そう、ほむらと決めたんだ。

(もつと早く契約するべきだったのかな… そうすれば、もつとなにかが変わって…)

「契約するんだね。ならばきみの願いはなんだい？」

『あたしの願いは… マミさんとほむらを治すこと…！』

「わかった。なら、その願いを口にするといひ」

…は？

「口に出した願望を願いとして受け止め、対価としてソウルジエムを産み出す。それが僕らの契約だからね。

テレパシーじゃなくて、ちゃんと自分の口で言わないと願いは叶えられないんだよ」

なによ、それ。

「人間は思考に雑念が混じりやすいからね。当人がこうしたいと整理し口に出した言葉でない」と正確性が失われてしまうのさ」

『ふぎけないでよ、あたしは喉も潰されて声が…！』

「僕らはいつだって公平だよ。きみだけを特別扱いするわけにはいかないじゃないか」

あんたってやつは

——ゴキリ

☆

駆け寄ってくる音が聞こえた。

それが誰かなんて考えるまでもない。何度も繰り返ししてしまった状況なのだから。

「……まどか」

「ほむらちゃん……！」

片目が潰されて、残った方も血で塗れていてあまり見えないけれど、まどかが涙を流しているのはわかる。

頭の片隅では、もう魔法少女になるしかないとは決意を固めていることも。

「ごめん…… 本当にごめんね…… 私がもっと早く契約してれば……」

謝らないで、まどか。謝らなければいけないのは私。

あなたに最悪最強の魔女の素質を持たせてしまったのも。

あのバママミに隙を与えてしまったことも。

全ては私の弱さが招いたことだから。

「だめ…… まどか……」

声に出しつつも、状況がそれを許さないことは理解している。

まどかが契約しなければどうなる。

まどかも彼女の家族や町の人たちもワルプルギスに蹂躪されておわりだ。

仮に美樹さやかが契約をしても勝機はない。

おそらく、バママを蘇生させる願いは、平凡な日常を生きてきた彼女の素質では足りない。

私の怪我を治す願いを叶えたところで、時間停止が使えない私がなんの役に立つだろう。

助っ人の可能性などは以ての外だ。

最も見滝原市に近い魔法少女である佐倉杏子は既に入らない。彼女がいらない以上、新たに魔法少女が参戦してくれるなど妄想幻想も甚だしい。

万が一ワルプルギスの噂を聞きつけやっけて来たとしても、その時にはもうワルプルギスは町も人々も破壊しつくした後だろう。

どういう形であれまどかが契約をしなければ、そもそもまどかは死んでしまうのだ。

(もう、時間を戻すしか……)

盾に手をかけ——思いとどまる。

やつは言っていた。

私が時間を繰り返せば繰り返すだけまどかの因果が強くなり、その因果の量に彼女が耐えられなくなる可能性がある。

これは半ば憶測だ。けれど、決して無根拠な虚言ではない。

現に繰り返す度にまどかは強大な素質を孕んできた。

因果の量が許容量を超えたとき、その器は壊れてしまうと考えるのが妥当だ。

ならば、私がこれ以上繰り返すことは彼女を苦しめる———それどころか彼女を存在すら消してしまうのでは。

…可能性は可能性。それでも、万が一でもそうなる可能性があるのなら。

私は、もう時間を巻き戻すことはできない。

「待つてほむらちゃん。すぐに治すから」

まどかがそう力強く私に告げる。

幾度も経験してきたから、こうなった時の彼女が止まらないのはわかっている。

もはや、魔法少女の真相を明かし思いとどまらせるような時間も無い。

私に出来ることはもうほとんどない。

あとは、ワルプルギスを倒したまどかが生きて戻るのを待ち、彼女が魔女になる前に

その命を断つ。

彼女が自身で愛した者たちをその手にかけることのないように。

そして、私は自分でソウルジェムを砕いて……いや、彼女の祈りで復活するであろう  
バマミに、私のグリーンフシードを残そう。

最後まで役立たずだった私のせめてもの償いだ。そんなことで、これまでの愚行を拭  
うことなんてできやしないが。

(……間違い、だったのかな)

私はまどかが死ぬ世界なんて認められなかった。だから契約した。

彼女が死んでしまう度に何度も何度も時を戻し続けてきた。

けれど。

人は死ぬ。それは誰にも抗えない事象だ。

これはそんな当たり前のことを受け入れられなかった罰なのだろうか。

まどかのいる世界に戻りたかった……そんなに許されない願いだったのかな。

「(イ)めんな(イ)こ」

もう謝罪も誰にも届いていないだろう。

「(イ)めんな(イ)こ」

なんとなくだが、言葉を漏らす度にソウルジエムが濁っていくのがわかる。

それでも言葉に出さずにはいられなかった。

まどかが魔法少女になるまで私の方がもつかもわからなくなってきた。

：： ああ、最後にと決めたことさえ満足にできないなんて。やっぱり、私はどうしようもなく駄目だなあ。

「弱くて、ごめんなさい」

パリン、となにかが割れるような音がした。

## 最後に残った道しるべ⑤

★

——ん

——さん

ママさんっ！

「——ッ！」

目が覚め意識が覚醒する。

瞬きをして視界を白黒とさせながら自分の状況を確認する。

あれ……私、さっきまでなにしてたんだっけ？

「やっと起きた。そろそろ準備しないと間に合わないぞ」

私の顔を覗き込むのは、燃えるような赤い髪の少女——佐倉杏子だ。

その姿を認めた時、私は思わず彼女の頬に手を伸ばしていた。

温もりを、存在を確かめるようにペタペタと、何度も触つて離して、ぐにぐにと弄つて。

「お、おいマミさん?」

そんな私の奇行にも思える挙動への不審と羞恥からくる恥ずかしさで、彼女は頬をほんのりと紅潮させながら戸惑った。

「ご、ごめんなさい、なんだかあなたを見たら安心しちゃって」

そう。なぜか私は佐倉さんを見た時安心してしまった。

なんだか無性に愛おしくなってしまった。

「変なマミさん。ま、いいけどさ」

理由を聞くこともなく、彼女は私の手を引きながらはにかんだ。

「早く行くよ、マミさん」

彼女の笑顔につられて私も笑い、引かれるままに彼女についていった。

二人で歩いていると、ほどなくして、三つの影が見えた。

鹿目さん、美樹さん、暁美さんだ。

「マミさん、杏子ちゃん!」

「待たせたなまどか」

私たちを見つけた鹿目さんが駆け寄り、後に続いて美樹さんと暁美さんも向かってく

る。

「こんにちわーمام子さん。全く、遅いぞ杏子」

「なんであたしにだけ言うんだよ」

「どうせあんたがもたもたしてたから遅刻しちやっただよ。さやかちゃんにはお見通しなのだー」

「ちげーよ、مام子さん起こすのに手間取ったんだよ」

「ごめんなさい、美樹さん」

「なんと寝起きمام子さんとは！こいつはレア物だ！」

「おい、あたしと対応違いすぎないか」

「مامさんは特別なんです」

美樹さんと佐倉さんが火花を散らしあうのを他所に、暁美さんと鹿目さんがこれからどこに行こうかと話し合っている。

きつと、これから私たち5人で遊びに行くのだろう。

和やかで、賑やかに、楽しいことを思い切り楽しんで。休みが終わったらみんなで学校へ行って、勉強を頑張つて。

きつとそれは幸せなことなんだろう。当たり前前にあるべき、平和な光景なのだろう。だからこそ

「ありがとう佐倉さん」

お礼と。

「……ごめんなさい」

謝罪を。

「マミさん？」

心配そうにこちらを見つめる佐倉さんに、頑張つて笑顔を作る。

「私ね、ずっとこんな日々を望んでいた。あなたがいて、皆がいて、戦いなんて無縁で、なんでもないささやかな日々を」

言葉にする度に、私の身体が崩れていく。

こんな当たり前のはずの日々を”夢”だと断ずれば、もうそれを現実と認めることはできなくなる。

いまさつきまで鹿目さん、美樹さん、暁美さんだったものが、蠢く黒いもやに変わってしまふ。

だらりと伸ばした腕が赤く染まり、視界の半分が消えうせ、服からは赤い染みが滲みはじめた。

「私は魔法少女なんて嫌だった。あなたがいなければ、きつと、もつと早くに潰れてた」  
もしもこの夢に溺れていられれば、それはとても幸せなことなのだろう。

痛みもない、悲しみも無い、私の理想の世界だ。

だからこそ、この理想は否定しなければいけない。

「…嫌なら、忘れて、いいだろ」

佐倉さんの声は震えていた。震えながらも、力強く訴えてきた。

「もう充分だよ。ママさんはずっと戦ってきた。あんたがそこまで頑張らなくても、あとはあいつらが解決してくれる。…そうだ、あんたがなにもかもを背負う必要なんてないんだ。

あいつらだって誰もあんたを恨んでなんかかない。あたしとの約束に縛られてるなら、そんなもの忘れてくれていい。わかるだろ、あんなのただの出まかせだ。

あんたに死んでほしくなかったから適当にでっちあげただけなんだ。だから…も  
ういいんだよ」

佐倉さんは消え入りそうな声で必死に捲し立てる。

そんな彼女を受け入れたくなる。今すぐにでも手をとって全部忘れたいくなる。  
けれど。

「それでも忘れられないの」

私の信じてきたものが虚構だという言葉に衝撃を受けることはなかった。

本当はわかっていた。

もしも私が佐倉さんの立場だったら、見知らぬ人を救う為に命を賭けるなんて思った  
だろうか？きつと思わない。

もつと単純に、死なないでほしいとか、元気に過ごしてほしいとか。そういうことを  
願うと思う。

でも、あの時の私だと多分「あの子を救えなかった自分が生きているのを許せない」と  
でも言つて自殺を選んでしまうだろう。

だから、佐倉さんが仮初の目的を作つて少しでも長生きさせようとしたのはなんと  
くわかつていた。

わかつていたけど気づかないふりをして生きていく支えにしていた。

「それにね、私が幸せに溺れている間に、まだ戦っている子たちがいる」  
魔法少女にならなくても、頼らなくても、人を助けることが出来るのを証明してくれ  
た子たちがいる。

背中を預け、共に命をかけて戦ってくれている子がいる。

彼女達が苦しんでいるなら、まだ諦めていないなら、私がここで夢を見ている場合  
じゃない。

「私はあの子たちを護りたい。償いでも誓いでもなく、私の心に従つて」

「ツ…」

佐倉さんはなにか言いかけたけれど、私の眼を見た彼女は、なにかを察したかのよう  
に言葉を失った。

「本当にありがとう。：：じゃあ、行ってきます」

そんな佐倉さんに感謝を伝え、私は振り返り足を進めた。

瞬間、ズキリと身体中に痛みが走った。

私の身体が拒否している。

ここから離れないで、夢の中にいさせてと。

ならばこちらに進むのが正しい。

この痛みこそが護るべき現実なのだから。

蝕む痛み能耐えつつ、私は歩を進める。

一歩一歩が私と現実の死を思い出させる。

ぼとぼと流れ落ちていく血を踏みしめながら、覚束ない足取りで前へと進む。

ぼとり、と左腕が落ちた。別段それに想いを馳せることなく、進む。

気がつけば血はもう流れていなかった。代わりに、ぐらりと私の視界が傾き、べちゃ

りと無様に転がった。

(行かなくちゃ。：：)

行かなければ何も護れない。夢から覚めなければなにもできない。

震える腕で起き上がろうとするけれど、ガクリと力が抜けて倒れてしまう。  
なんともみっともない姿だろう。

こんな様でいったいなにが護れるというのだ。

(私はまだ戦える。：まだ。：)

それでも這ってでも進む。絶対に、彼女たちを諦めたくない。

その一念だけで私の意識は繋ぎ止められている。

そんな私を見かねたのだろうか。

頭上から佐倉さんの声がした。

## 【頑張れと言った場合】

## 最後に残った道しるべ⑥

「頑張れ」

声が聞こえた。

立ち去ろうとする私を応援してくれる佐倉さんの声が。

「止まるな。でないと間に合わなくなる」

思わず振り返ろうとする私だが、佐倉さんの声に阻まれる。

「ああ、そうだ。振り返る余裕などない。」

余力はもう限られている。

でも大丈夫。

佐倉さんが見守ってくれている。それだけで私は何処までも進むことが出来る。

待っていて、みんな。すぐに行くから。

私が… みんなを… まも… る、か… ら…

…

…

…

こえがきこえる。

——悪いな。もう、見てられなかったんだ

かなしさとこうかいがにじみでてくるような、あのこのこえが

…  
…  
…

★

一瞬だった。

倒れたビルの窓ガラスがパリン、と割れたと思ったら、閃光が奔り、まどかの顔に当たって弾けた。

弾かれたまどかの頭がぐるりとまわって私と目が合った。  
死んだ。即死だ

確かめなくてもわかる。だって、あの子の頭と身体は離れ離れになってしまったから。

「あ……」

死んでしまった。

呆気なく。

死んでしまった。

私が何もできないまま

死んでしまった。

あのこは決意したことすらまだなにもできていないのに。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ」

死んでしまった。死んでしまった。

死んでしまった。死んでしまった。

死んでしまった。死んでしまった。

死んでしまった。死んでしまった。

死んでしまった。死んでしまった。



誰が覚えていようが覚えていまいが、彼女が死んだ事実は覆らない。

私にはもう、諦めるという選択肢すらなかったんだ。

「次、こそは、かならず。かならず助けるから。！」

まどかが消えてしまわないことを祈りながら、左腕の盾に触れ、砂時計を逆さに返した。

大型魔女『ワルプルギスの夜』、見滝原市にて上陸完了。

崩落建築物数 計測不明。

倒壊家屋数 計測不明。

被害者数 計測不明。

生存者数、0名。

「マミ、頼んだー！」

「任せてちょうだい！ティロ・フィナーレ！」

バマミの放った大砲が薔薇の魔女を貫き爆発した。

魔女の落としたグリーンフィードを拾うと、二人ははにかみながらハイタッチで喜び合った。

「へへッ、ちよろいちよろい。ベテラン魔法少女がまともに組めば敵なしだぜ」

「もう、調子いいんだから……でも、そうね。これならあのワルプルギスの夜ですら倒せるかもね」

「浮かれてんのはどっちだったっーんだよ。なあほむら」

「え、ええ……」

不意に同意を求められた私は、思わず返事を濁すが、そんなことは気にせず二人は勝利の喜びを分かち合っていた。

巻き戻した先のこの時間軸ではまどかは消えていなかった。

美樹さやかも契約しておらず、現状では二人との関係も良好なためキュウベえとの契約の危険性は低い。

更には、バマミと佐倉杏子の両者が生存しており、前回ののような複雑な事情もなく、敵対している様子もなく。

その為、私を含めた三人の同盟は拗れることなく成立。

現状で望める最大の戦力のはず、なのに……

(……勝てる気がしない)

この周回のバمامミも佐倉杏子も決して弱い訳ではない。ベテランというだけあり実力は確かだ。

それでも、前回のバمامミと比べるとどうしても劣る。

以前の彼女であれば薔薇の魔女など一人で容易く葬れた。

大抵の魔女であれば組む必要もなく、あんな大技を使うまでもなく倒してきた。

恐らく、この三人で挑むよりもあの時の彼女一人の方が強い。

これでは、彼女ですら敵わなかったワルプルギスの夜を倒すなど夢のまた夢だ。

それでも、バمامミもいる。佐倉杏子もいる。まどか達は契約していない現状は最良と言つても過言ではない。

勝つんだ。今度こそ、まどかを救う為にも。

や  
は  
り  
勝  
て  
な  
か  
つ  
た  
。　そ  
れ  
も  
、　前  
の  
よ  
う  
に  
追  
い  
詰  
め  
た  
上  
で  
じ  
ゃ  
な  
い  
。

為すすべもなくバمامミも佐倉杏子も殺され、打つ手が無くなったまどかが契約してしまおうという何度も見せつけられた光景だ。

どこで間違えた。

戦力は最大限揃ったというのに、どうして前よりも上手くいかないの。

なにか違う。

バمامミはいる。まどか達とも友好的な関係を築いてきた。むしろ、佐倉杏子が加わったぶん人手不足の面はカバーできたはずだ。

なのになぜ。

…違うのは、バمامミの強さだ。

彼女一人の時は、今回の私たち三人が力を合わせるよりも明らかに強かった。前回も、私を助けようとしていなければ、勝っていたのは彼女かもしれない。つまり、彼女は一人で戦っている時の方が強い。

縁を断ち切って。他者との繋がりをより希薄にして。

そうして独りで洗練した結果がああ時のバمامミなのではないだろうか。

だとすれば…だとすればだ。

ああ時の彼女を欲するのであれば、私と佐倉杏子は必要ない。

ただ距離を置くだけでは駄目だ。

私たちという存在を彼女の中から消してしまわなければいけない。

「わざわざこんなところを訪ねてくるなんてとんだ物好きだねえ」

深夜、廃協会に足を運んだ私を見て佐倉杏子は警戒心を露わにした。

…私はいま、バカげたことを考えている。

わかっている。こんな行為で本当にまどかを救えるはずがないことは。でももうあとが無い。これ以上の失敗は許されない。

可能性が僅かにでもあるのなら、もうそれに縋るしかない。

「……めんなさい」

後ろ手に隠していた銃の震えが止まる。

私の突然の謝罪に杏子は眉根を潜め、なにごとかを口にしようとした。

けれど、彼女の声が届く前に、引き金には力が込められていて、そして。パァン、と乾いた音が鳴り響いた。

【もういいんだよと言った場合】

最後に残った道しるべ⑥

「もういいんだよ」

佐倉さんが私の顔にそつと手を添えると、途端に瞼が重くなっていく。

「あんたがこれ以上無理をする必要はないんだ」

彼女の声が温かく染み渡っていき、全身から力が抜けていく。

「あたしが護るよ。あんたが護りたかったもの、全部」

慈愛すら感じる佐倉さんの言葉を聞き遂げると、もう動くことすらできなくなってしまう。

「だから… お休み、マミさん」

彼女の言葉にお休み、と心中で返すと、私の視界は黒に染まり意識は遠のいていった。

パリン、とビルのガラスが割れ、桃色の光がまどか目掛けて高速で迫る。

私が危ないと声を出す前に、光は彼女の目前にまで迫り——弾け散った。

思わず小さな悲鳴を上げて尻餅を着くまどか。だが、光線が当たった訳ではないらしく、怪我もない。

つまりあの光線は弾かれた。なぜ。

ふわり、となにかが私たちの前に降り立った。

その姿に息を呑む。

長槍を片手に華やかな赤い衣装を身に付けた細身の人型で、頭部は蠟燭に灯された火。

ソレは確かに魔女だった。

(なんで……彼女がいます……！)

私はこの魔女を知っている。

数こそは多くないが、確かにこの目で見たことがある。

佐倉杏子が遍く全てを呪い生まれた魔女、武旦の魔女。

だが、バマミの証言が正しければ彼女は既に死んでいる。魔女と化した後にここまで

生き延びてきたのだろうか？

なんにせよ最悪だ。ただでさえ強力なこの魔女とワルプルギスの夜の出現が重なるなんて。

絶望感に苛まれる私とは対照的に、まどかは必死にこちらへ這って来て私と魔女の間に立ち、両腕を広げて私を背に庇った。

やめてまどか。私はもう時を巻き戻せない。せめて、あなたはあなたの護りたいものの為にだけ生命を使えばいい。

「わ、わたしが護る…。わたしが…！」

私の懇願虚しく、まどかは契約のことすら頭の中から吹き飛ぶほどの恐怖に抗いながらも、私を助ける為に立ち続ける。

魔女はそんな彼女の想いなど知らんとばかりに、無情にも槍を振り下ろした。

まどかの背後、私の頭上にまで迫っていた使い魔に向けて。

「え…？」

私は思わず呆けてしまう。

この近距離で、魔女がロクに動けない一般人相手に攻撃を外すとは思えない。

まさかとは思うが、守ったというのか？魔女が、私たちを？

驚愕と困惑に囚われる私の頭上から影が覆いかぶさる。

もう一体の武旦の魔女——彼女の魔法による分身——が傍らに抱えていたソレを私たちの傍にそつと置いた。

美樹さやかだった。彼女の惨状を見て私たちは絶句する。

全身を傷だらけにして、白目を向き、手足の至る箇所がねじ曲がりへし折れていた。それでも彼女はまだ生きていた。縋りつき泣きわめいていたまどかも、さやかの呼吸が聞こえたことで多少安堵したようだった。

下手人はこの魔女ではないだろう。魔女が犯人ならば、さやかはどうに死んでいなければおかしい。

つまり、魔女はさやかを助けたということになるが、そんなことがありえるのか？

だが、もしも、万が一この魔女が私たちを助けてくれたのなら……！

そんな不安と期待の混じった私の視線を知ってか知らずか、魔女は私に背を向けワルプルギスの夜へと向き合った。

魔女は無言のまま槍を召喚し、未だに笑い声をあげるワルプルギスの夜へと投擲する。

刺さった。だが、奴にはさほど効いていないのか、笑い声が途切れることもない。

間髪入れずに槍が生成され、次々に放たれていく。

刺さったのが20を超えたあたりから、ワルプルギスの夜もまた反撃に移る。

迫りくる槍を炎で一掃し、使い魔たちを魔女へ向けて放ち一斉に攻撃させる。

魔女はそれに対し分身で対応し、周囲の使い魔たちを一掃した。

現状は互角に立ち回っているが、このまま膠着状態が長引けば自力で勝るワルプルギスの夜が勝る。

それを理解しているのだろうか。

ワルプルギスが浮かばせた巨大なビルに対し、魔女もまた巨大な槍を生み出し対峙する。

ワルプルギスの夜のダメージはまだ癒えていない。

この槍であるビルを貫き通し、奥にいるワルプルギスまで届けば倒せるかもしれない。

——負けないで。勝って魔女……いいえ、杏子！

両者の最大の一撃が放たれる刹那、瞼を閉じ祈る。

そして目を再び開けた時——信じられないものを見た。

いつの間にか景色が変貌していた。

先ほどまで嵐に包まれていた周囲一帯が、薄暗く狭い回廊に変貌していた。

この光景には見覚えがある。結界だ。

この魔女の結界が確かにこのような景色をしていた。

私たちは魔女の結界に飲み込まれたのだろう。

だがなぜ？なぜ彼女は技を衝突させるまでもなく私たちを結界に取り込んだ？

その答えはすぐに返ってきた。

ゾブリ、と刃物を肉に突き立てた音がした。

魔女の槍が、気絶していた美樹さやか腹部に立てられた音だった。

「え…」

突然のことに思考が停止する。

杏子は私たちを助けてくれたのではないのか？なぜさやかが刺されている？

「さ、さやかちや」

思わず手を伸ばしたまどかの胸元にも、そして私の胸部にも槍が生えた。

「！！」

激痛のためか、まどかの声にならない絶叫が響く。

もはや身体感覚がほとんどない私は叫びすら上げられなかった。

苦痛に顔が歪むまどかを見ながらも、私は必死に思考を整理しようとする。

わけがわからない。わけがわからない。わけがわからない。

なんで私たちが彼女に殺される!?

いくら脳髓をフルに働かせても答えなど出る筈もなく。

けれど、先に刺したさやかをそつと古ぼけた椅子に座らせる様を、慈しみすら覚えてしまうその手際を見て理解できた。

（魔女はただの魔女だった。：簡単なこと、よね）

この魔女は私たちを助けに現れた訳ではない。

私たちという餌を独占する為に一時的に保護し、ワルプルギスの夜という障害を排除しようとしただけ。

普通の魔女が、自らを狩りに来た魔法少女を排除するために牙を向くのとなら変わりにない。

ただ、最後の対峙で己の勝算が薄いと理解した魔女は、障害の排除よりも餌の確保を優先した為に結界に籠り私たちを連れ去った。

現れたのは杏子ではなく、ただの魔女だったというだけだ。

それを理解するももうどうしようもない。

さやかは気絶していたのがせめてもの救いだったといえよう。もしも意識があれば、激痛と共に己が失血死する様を見せつけられていたのだから。

私も私で身体感覚なんてほとんどないため痛みすらありはしない。

この中で一番苦しんでいるのはまどかだ。激痛の中で気絶すら許されず私たちが死にゆくさまを見せつけられているのだから。

「にげ、にげて、ほむ、ら、ちゃん」

こんな状況に陥つても尚、まどかは私たちを逃がそうとしている。

ああ。こんな彼女を助けたいと願うのに。助けなければいけないのに。

どうして私はなにもできない。どうして彼女の結末をこんな最悪の形にしかできなかった。

憎い。

こんな運命を強いる世界のすべてが。何もできない私が。目に入る全てが憎しみで歪んでいく。

絶望が私の感情を侵食していく。

これが魔女になるといふことなのかと理解していても、絶望を止めることはできない。止める気すらおきない。

… ああ、生きていていいことなんて何一つなかった。

やはり私は最初のあの時、彼女の代わりに死んでおくべきだったんだ。

「…ふいふい」

涙さえ流れず、ただひたすら乾いた笑いだけが絞り出される。

目の前の惨劇が見えているのに、笑いたい訳じゃないのに、気が付けば顔は笑顔を作っていた。

「あは、はははは」

気持ち悪い笑い声だと思う。でも笑わなくちややってられない。  
なんとなくワルプルギスがいつも笑っている理由が分かった気がする。  
もうどうでもいいけど。

——  
パリン

．．．．．  
なにも。なにもみえないくらやみのなか。ももいろのひかりがひとすじはしつた、きがした。

「……」

目を開ける。視界いっぱい広がるのは、見慣れた白の天井。時間遡航に成功した証だ。

むくりと上体を起こし、己の両手をわきわきと動かしてみる。

手の機能に異常はなく体調も特別悪いわけではない。

けれどなにかがおかしい。

なにかがごっそり消えてしまったかのような違和感がある。

必死に思い出そうとするも、なにも思いつかない。手がかりすらわからない。

幾分か悩んだところで私は考えるのをやめた。

忘れてしまったことにいつまでも固執する暇なんて私にはない。

まどか…… 例えなんど繰り返すことになっても何度道に迷っても構わない。

私は絶対にあなたを救ってみせる！

## 最後に残った道しるべ⑦

★

嵐が止んで、魔女が消え去って。

水たまりに尻餅をつくわたしの身体を陽の光が照らす。

その気持ちよさに、こんな時でなければお昼寝でもしちゃうんだろうなと思いがら、頑張つて目を開けて。

ほどなくして、わたしが待っていたあの子が息を切らしながら走ってきた。

「まどか．．． やっぱり．．． ！」

さやかちゃん、力なく瓦礫にもたれかかるわたしを見ると、目を見開いてがくりと膝を着いた。

それからぼろぼろと涙を零しながら、「なにもできなかつた」「ごめん」とだけ消え入りそうな声で呟くと、嗚咽交じりに泣き始めてしまった。

その姿にわたしの心臓が締め付けられ、いたたまれなさとしりぞきで心がいっぱいになって。

本当ならさやかちゃんと一緒に泣き続けたいけれど、わたしに遺された時間はもうあ

まらない。

だからわたしはさやかちゃんを安心してできるように無理やり微笑んだ。

「無事でよかった」

「あんたが、無事じゃ、なくて、どうすんのよ」

「えへへ、ちよつと無理しちやつたかも。でも、みんな助けられてよかった。あ。。」

さやかちゃんへと伸ばした手から力が抜け、そのままのめりに倒れこんでしまう。

そんなわたしをさやかちゃんは抱きしめ上げて、傍らに佇むキュウベえに怒鳴り散らした。

「キュウベえ！あたしと契約してまどかを元に戻して！」

「それは不可能だ。彼女の魔力ときみの素質ではとても釣り合わない。いくら僕たちでもここまでの差を埋める術は持たないよ」

「ツ… なら、まどかのソウルジェムの濁りを無くして！」

「それも不可能だ。まどかの濁りはもはやグリーンフシードを使っても取れない域にまで達している。きみが願えばきみの素質の分くらいは緩和できるかもしれないけれど、気休めにもなりはしないさ」

「こ、の…！ううん、それでもいい。あたしの素質で消せるだけの穢れを…！」

契約しようとするさやかちゃんの口に、そつと人差し指を当てて。

嬉しかった。

わたしはさやかちゃんのことを大好きだけど、さやかちゃんがどん臭くてなにもできないわたしのことをどう思ってるか不安にならなかったことはない。

でも、さやかちゃんがわたしを助けようと必死になつてくれている。わたしの悩みなんて杞憂もいところだったと証明してくれている。

わたしが見栄なんて張らなくてもさやかちゃんはわたしを大切に想ってくれるなら、このままさやかちゃんの厚意に縋りたい黒い気持ち滲み出てくる。

「もう、充分だよ。ありがとさやかちゃん」

嬉しいからこそ、さやかちゃんを契約させたくない。

さやかちゃんまで魔法少女にさせるわけには、死なせる訳にはいかない。

さやかちゃんとはむらちゃんには、ママさんやわたしの分まで生きて幸せになつてほしい。

「わたしね、契約したことに後悔なんてしてないよ。家族だけじゃない。さやかちゃんとほむらちゃんも助けられたんだもん」

「ほむら：：。そうだ、ほむらは」

「もういないよ。まどかのきみたちを助けて、という願いが反映された結果、単純に生命の危機に晒されていたきみは五体満足の復活を。」

この時間軸に絶望し魔女になったほむらは、魔女から戻りこの時間軸の記憶が消去され再び過去へと送り出された。

ママはなぜか蘇らなかつたけど……もしかしたら、本質的にはこの死にたいと願っていたのかもしれない。そう考えるとまどかの『助けて』という願いに準じた結果、蘇生を拒んだのかもしれないね」

もう上手く言葉を紡げないわたしに変わり、キュウベえがワルプルギスの夜を倒したその直後に、ソウルジェムが濁り切った魔法少女の末路と合わせてわたしに聞かせてくれた説明をしてくれた。

それはとても助かることだけど、さやかちゃんの意識がキュウベえに向きそうだったのでわたしは頑張つてすぐに口を開いた。

「わたしね、この世界が大好き。こんなわたしを大切にしてくれる人にたくさん出会えて、大好きな友達がたくさん出来て、楽しかったことがいっぱいあった」

わたしは本当に幸せものだと思う。  
家族に恵まれて。

学校では仁美ちゃんや先生みたいにクラスに恵まれて。

ママさんみたいな可愛くてかつこいい先輩に巡り合えて。

こんなわたしを助ける為にずっと戦い続けてくれたほむらちゃんがいてくれて。

この瞬間にさやかちゃんがいてくれる。

わたしはこんなに優しい世界を呪いたくなんてない。壊したくなんてない。

「だから、お願い、できるかな」

わたしのその言葉で全てを察したさやかちゃんは言葉を失い、下唇を噛み締めて俯いてしまう。

酷いことを頼んでるのはわかってる。きつと、この後、わたしは地獄に行くだろう。

当然だ。最高の友達をいまもお傷つけ続けて、親友の心にすら大きな傷跡を着けていくのだから。

やがて、さやかちゃんは意を決したかのように涙に濡れた顔を上げ、わたしの胸のソウルジエムに手を当てた。

「まどか」

消え入りそうなさやかちゃんの声が耳に届く。

「生まれ変わっても、またあたしと友達になつてくれる？」

その問いかけはあまりにも予想外で。わたしにとってはこれ以上ない嬉しい言葉だった。

思わず涙が溢れ、自然と笑顔になっていた。

「また、いつもみたいに遊ぼうね、さやかちゃん」

わたしのその言葉と共に、さやかちゃんが胸元を圧す力が強くなり。そして。

パリン、と魂が割れる音と共にわたしの意識が遠のいた。

意識が完全に消え去るその直前、さやかちゃんの最後の泣き声が聞こえたような気がした。

【馬鹿だなど言った場合】

最後に残った道しるべ⑥

「……馬鹿だな、マミさんは」

佐倉さんが倒れる私を見下ろして呟いた。

「そんな有様で向かったところまでどうしようもないだろ。決めたじゃんか、どうしようもなくなった時は隠したりするなって」

倒れる私の傍に膝を着き、背中にそっと手を添えてくれる。

もう顔を動かすこともできない為、佐倉さんの顔を見ることがすら敵わない。

「……『もしワルプルギスの夜がやってくる時が来たら、一緒にこの町を守ろう』」

「……！」

思わず息を呑む。

覚えている。忘れるはずがない。

かつて、共に戦っていた時、何気なく交わした言葉。

「約束しただろ。あんたの護りたいものは、あたしの護りたいものなんだ。だから」

佐倉さんは、血に濡れるのも構わず、私の腕を肩に回し立ち上がるのを支えてくれた。残った瞳を佐倉さんの方へと向ける。

「一緒に倒そう、あいつを」

笑っていた。力強く、夢見がちだったあの頃と同じ笑顔を向けてくれていた。

だから私も思わず笑った。

「ええ。行きましよう佐倉さん」

あなたがいてくれるなら、もう何も怖くなんてないから。

パリン、とビルのガラスが割れ、桃色の光がまどか目掛けて高速で迫る。

私が危ないと声を出す前に、光は彼女の目前にまで迫り——弾け散った。

思わず小さな悲鳴を上げて尻餅を着くまどか。だが、光線が当たった訳ではないらしく、怪我もない。

つまりあの光線は弾かれた。なぜ。

ふわり、となにかが私たちの前に降り立った。

その姿に息を呑む。

長槍を片手に華やかな赤い衣装を身に付けた細身の人形で、頭部は蠟燭に灯された火。

ソレは確かに魔女だった。

(なんで……彼女がいま……！)

私はこの魔女を知っている。

数こそは多くないが、確かにこの目で見たことがある。

佐倉杏子が遍く全てを呪い生まれした魔女、武旦の魔女。

だが、バマミの証言が正しければ彼女は既に死んでいる。魔女と化した後にここまで生き延びてきたのだろうか？

なんにせよ最悪だ。ただでさえ強力なこの魔女とワルプルギスの夜の出現が重なるなんて。

絶望感に苛まれる私とは対照的に、まどかは必死にこちらへ這って来て私と魔女の間に立ち、両腕を広げて私を背に庇った。

やめてまどか。私はもう時を巻き戻せない。せめて、あなたはあなたの護りたいものの為にだけ生命を使えばいい。

「わ、わたしが護る……わたしが……！」

私の懇願虚しく、まどかは契約のことすら頭の中から吹き飛ぶほどの恐怖に抗いながらも、私を助ける為に立ち続ける。

魔女はそんな彼女の想いなど知らんとばかりに、無情にも槍を振り下ろした。

まどかの背後、私の頭上にまで迫っていた使い魔に向けて。

「え……？」

私は思わず呆けてしまう。

この近距離で、魔女がロクに動けない一般人相手に攻撃を外すとは思えない。

まさかとは思うが、守ったというのか？ 魔女が、私たちを？

驚愕と困惑に囚われる私の頭上から影が覆いかぶさる。

もう一体の武旦の魔女——彼女の魔法による分身——が傍らに抱えていたソレを私たちの傍にそっと置いた。

美樹さやかだった。彼女の惨状を見て私たちは絶句する。

全身を傷だらけにして、目は充血し、手足の至る箇所がねじ曲がりへし折れていた。

それでも彼女はまだ生きていた。縋りつき泣きわめいていたまどかも、さやかの呻きと呼吸が聞こえたことで多少落ち着いたようだった。

下手人はこの魔女ではないだろう。魔女が犯人ならば、さやかはどうに死んでいなければおかしい。

つまり、魔女はさやかを助けたということになるが、そんなことがありえるのか？

だが、もしも、万が一この魔女が私たちを助けてくれたのなら……！

そんな不安と期待の混じった私の視線を知ってか知らずか、魔女は私に背を向けワルプルギスの夜へと向き合った。

魔女は無言のまま槍を召喚し、未だに笑い声をあげるワルプルギスの夜へと投擲する。

刺さった。だが、奴にはさほど効いていないのか、笑い声が途切れることもない。

間髪入れずに槍が生成され、次々に放たれていく。

刺さったのが20を超えたあたりから、ワルプルギスの夜もまた反撃に移る。

迫りくる槍を炎で一掃し、使い魔たちを魔女へ向けて放ち一斉に攻撃させる。

魔女はそれに対し分身で対応するも、使い魔の数は膨大だ。

魔女の槍のみでは掃討できず、数体が槍の乱舞をかくぐり魔女へと肉薄し魔女の身体を削り取っていく。

ぐらりと魔女の身体が傾き、血のようなどろどろとしたものが溢れだした。

やられてしまう。私が息を呑んだその時だ。

パアン、と数度の銃声が響き、使い魔たちが弾け飛ぶ。

銃撃だ。私の銃じゃない。この音は——マスキット銃の音は。

「田、さん」

彼女の名を呼ぶも、その姿はどこにも見当たらない。

ただ、幾多ものマスキット銃だけが魔女の周囲に浮かんでいた。

まさか杏子の魔女がこの銃を操っているというのか？なぜ、どうやって？

溢れる疑問は解消されることなく、魔女とマスキット銃は次々に使い魔を消し去っていく。

その光景に、私は彼女たちの——バマミと佐倉杏子の背中を見ていた。

それはまだかも、辛うじて意識を取り戻していたさやかもそうであったように。

気が付けば私たちは拳を握りしめていた。まるでヒーローショーに夢中になる子供のように、己の置かれている状況すら忘れて魔女たちを見守っていた。

……わかつている。杏子とバマミが私たちを守ってくれているのではなく、ただ魔女の習性に従っているだけなのかもしれないことは。

でも、私はいまこの時だけは信じたい。彼女たちが奇跡と魔法を起こしてくれたんだと。

この残酷な現実にも希望を齎してくれたのだと。

「アーツハハハハ!!」

迫る数多の槍や銃弾を、ワルプルギスは笑いながら轟炎で迎え撃つ。

焼き尽くされる銃弾や槍にも揺るがず、杏子たちは分身をぶつけて炎を散らし、一際巨大な槍を無防備に空いた口に目掛けて投げつけた。

高速で飛来する槍はワルプルギスの口腔を貫き、その勢いのまま巨体を地面に墜落させる。

杏子たちはワルプルギスが立ち上がる前に上空に飛び上がり、奴の手足へと槍を打ち込み固定し、柄に巻き付けられていたりボンが槍ごと手足を縛り付けることで拘束をより強固なものにした。

ぼとぼと杏子の身体から液体が零れ落ち、身体が崩壊していく。

このままでは彼女の方が持ちそうにない。

だがそれに構うことなく、彼女は巨大な銃を創り出し狙いを定める。

——— テイロ・フィンナーレ

幻聴か妄想か。

確かに私の耳に届いたその声は、彼女の、バマミのものだった。

この技の名前を聞くのも随分久しぶりに思える。

だって、彼女はこの時間軸において一度も必殺技の名前を叫んでいなかったのだから。

ら。

そう——巴さん、貴女はいま、この時が最高に燃えているのね。

そう思うと、自然と喉元が熱くなっていた。

本当に出ているかはわからない声を絞り出して、ただ我武者羅に叫んだ。

まどかもさやかも同じ気持ちのようで、女の子らしい可憐さが微塵もないくらいくしゃくしゃになった顔で、共に叫んでいた。

「いけえええええええ!! マミさん!! 杏子 (ちゃん) !!」

私たちの叫びが届いたのかはわからない。

けれど、わかるのは大砲が発射されるまでにほんの微かな空白の時間があったこと。

放たれた砲弾はワルブルギスの口腔に刺さっていた槍に着弾したこと。

そして。

視界一帯が真っ白な閃光に包まれる中で聞こえた、かつて彼女たちの編み出した合体技の名前。

——テイロ・ランツィア

## 最後に残った道しるべ⑦

★

「ん…」

カーテンから差し込む朝日が私の瞼を叩き、目が覚めた。

視界に広がるのは病院の見慣れた白天井——ではなく、私の家の天井だった。

ワルプルギスの夜との戦いが終わって早数週間。

建物は幾分か壊れていたものの、奇跡的にも目立った死傷者はおらず、最悪最強の魔女が現れた町にしてはかなり被害を抑えた結果だった。

生き残った私たちはというと、特に目立った外傷のないまどかはそのまま無事に家族の下へ帰ることができた。

さやかは、緊張の糸が切れたのかまた気を失い、そのまま病院へと運ばれ治療を受けた。意識は戻っていないが命に別状はないようだ。

私は病院へと運ばれるのを避け、ソウルジェムの穢れをグリーンフィードで回収しながら

ら自宅で療養している。失ったはずの足が突如戻ったとなれば病院で大騒ぎになるからだ。

別に、寿命を縮めてまで身体を戻すつもりもないが。

ワルプルギスの夜は杏子の魔女とマミの砲撃を受けて消滅した。

その攻撃で力尽きてしまったのか、杏子のグリーフシードもマミのソウルジエムも消滅していた。

杏子とマミ、あの二人に私たちは救われたのだ。

玄関のインターフォンが鳴り、ガチャリとドアの鍵を開ける音がした。

「おはよう、ほむらちゃん」

やってきたのはまどかだ。両手にはねぎやら大根やらがはみ出したビニール袋を抱えている。

「ほむらちゃん、朝ご飯まだだよね。今日は目玉焼きでいいかな？」

「…ええ、構わないわ。いつもありがとう」

彼女は、ワルプルギスの夜以降、傷ついた私を気遣い、さやかの見舞いと並行して毎日看病しにきてくれていた。

食事や部屋の掃除どころか、着替えや入浴までも手伝ってもらっている。

無論、私も最初こそは申し訳ないからと断ったが、しかしまどかは無理やり押し通し

て私のもとに通っていた。

「あいつに：勝ったのよね」

台所で調理に勤しむまどかの背中を見つめながらぼつりとひとりごちる。

最初から、犠牲無しで済むなどと甘い考えは抱いていない。

そのうえで、魔法少女一人の犠牲でワルプルギスの夜を倒せ、まどかもさやかも契約していない。

結果だけ見れば上場だ。私も五体満足とは言えないが、生きているだけでも奇跡なのだから些細なことだ。

そう。私がかつて交わした約束は果たした。もう時を巻き戻す理由もない。

なのになぜ私は喜べない。

ママ達の喪失への悲しみに暮れているのか？それもあるかもしれない。

けれど、それ以上に空虚だ。

喜びどころか達成感もない。約束を果たしたことに心がほとんど動かないのだ。

脚は未だに元に戻っていない。

このワルプルギスのグリーンフィードが尽きれば、満足に戦えない私の寿命も直に尽きるだろう。

そのことを悲観しているのでもない。

ならばなぜ。なぜ、私の心はこんなにも空っぽなのだろう。

そんなことをぼんやりと考えていると、卵の焼けたいい匂いが鼻孔をくすぐり、テーブルに目玉焼きの乗った皿が。

「おまたせほむらちゃん。少し熱いから気をつけてね」

まどかか食べやすいよう4等分にされた目玉焼きをフォークで刺し、ふうと息をかけて冷まし私の口元へと運んでいく。

幼い子にやるようなそれを、私は少々気恥ずかしく感じながらも口を開けて待機。そのまま目玉焼きが口の中に運ばれた。

「お口に合うかな？」

「ええ。とても美味しいわ」

「よかったあ」

ホッと胸を撫でおろしたまどかを見て、思わず頬が緩む。

複雑な気持ちだ。

まどかが普通の女の娘として生きていく。その光景がたまらなく愛おしいのは依然変わらない。

私の感性が死んでいるわけではないのなら、なぜ私はこの勝利を喜べないのだろう。

私の疑問と入れ替わるようにまどかの携帯の着信音が鳴る。

まどかが私に断りを入れてから携帯に出て、何事かを話し始める。すると、みるみる内にまどかの目尻に涙が溜まっていく。

だがそれは不吉を現すどころか、むしろまどかの顔が綻び始めて。

電話から耳を離すと、まどかは喜色満面の笑顔で私に告げた。

「さやかちゃんが目を覚ましたって……！」

「さやかちゃああああああん!!!」

病室に飛び込むなり、まどかはさやかの名を叫びながら抱き着いた。

その彼女の様子にさやかはさして動じることなく右手でまどかの頭を撫でた。

「はいはい、さやかちゃんですよ……いやー愛されちゃってますねあたし」

お見舞いに来てくれた人たちをぐるりと見まわしたさやかはにへらと気の抜けた笑顔を浮かべた。

飛びついたまどかを見て我慢できなくなったのか、感極まり二人を抱きしめる志筑仁美。その三人を見て泣きながら娘の復帰を喜ぶさやかの両親。

左腕しか満足に動かせないのに笑顔で振舞うさやかを見て思うところがあるのか、神

妙な顔をして彼女を見つめる上条恭介。

さやかやまどか達の様子を見て、先生やまどかの両親、病院の医者たちも安心したのか「よかったよかった」と口々に話し始めて。

賑やかに朗らかなになっていく病室を、私は誰にも気づかれぬようにとそつと出て、室内の熱が収まったところを見計らい部屋に戻った。

さやかが無事だったのは当然嬉しいし喜びたいとも思う。

けれど、あの輪に加わるのは憚られた。

空気が苦手だとかそんな理由もないのに、なぜかは自分でもわからない。

そんな気持ちには隠したまま、私はほどほどにまどか達の喜び様を見守っていた。

そんな私に気づいていたのだろうか。

さやかは、私を手招きして呼び寄せそつと耳元で囁いた。

「あとで、一人で残ってくれるかな」

他の誰にも聞こえないほどの小さな、しかし皆に向けている朗らかな声とは違う重い声だった。

「……ま、生きてましたわ。こんなんでもさ」

見舞客は散り散りに去っていき、まどかは一旦、家に忘れ物をとりに帰ると言い残して。

いま病室にいるのはさやかと私の二人きり。

さやかから私に向けられたのは再会の喜びではなかった。

先ほどまでの活発さは鳴りを潜め、掠れた声に据わった目と無理やりに浮かべる乾いた笑顔。

から元気にもなっていないさやかのソレを見せられた時、今まで空虚だった胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

恨まれていると思った。

当然だ。私がある時、あんな頼みごとをしなければ、私がしくじらずママにワルブルギスを倒させていれば、彼女がこうまで傷つく必要もなかった。

彼女の怪我は私に責任がある。けれど、こうまで酷い怪我であれば、回復魔法が苦手な私に出来ることはない。

私にできるのはただ頭を下げたて謝ることだけだ。

「ごめん、まどかを止められなかった」

待っていたのは糾弾ではなく謝罪だった。

私は思わず下げかけていた頭を止め、さやかに向き直る。

「あたしたちさ、キュウベえに二人が敗けたって聞かされて思わず飛び出してきちゃったんだ。

あんだだけ二人を信じるって言ったのにさ、『キュウベえが嘘をついてる』『だからあたしたちがこの目で確かめなくちゃいけない』なんて理由着けて…

結局、それって二人を信じれなかったってことだよね」

彼女の口から出るのはひたすら自責の念ばかりだ。

私が彼女たちを擁護するよりも早くさやかは己への怨念を吐き出していく。

「ママさんたちが来てくれなかったらまどかも契約してたかもしれないし、あんたも死んでたかもしれない。あたしはただ徒に状況を振り回しただけだったよ」

「…あの状況なら仕方ないわ。あなたたちはなにも悪くない」

「その仕方ないのをどうにかするって約束したんでしょ、あたしたちは。頑張った、なんて言葉で済ませられることじゃないよ」

心臓が締め付けられるようだった。

だって、さやかが吐き出す恨み言は、彼女自身に向けたものはずなのに。最初の時間軸でまどかにただ助けられていただけの。

魔法少女の真実を知りながらも皆に上手く伝えられずにチームを崩壊させてしまい。交わした約束を護れずここにまで至ってしまった私自身を示しているように思えたから。

さよかの謝罪が終わってどれほど時が経っただろう。

やがて沈黙に耐えきれなかったのか、さやかが掠れた声で私に問いかける。

「どうしてあんたが泣いてるのよ」

え、と小さな文字が喉元からせりあがり、思わず頬に触れてみる。

濡れていた。温かく、そして冷たい涙が私の両頬を伝っていた。

困惑。狼狽。ただその感情だけが私の胸中を占めている。

なぜ私は泣いている。辛いのは私じゃないはずなのに。

… いいや違う。さよかの謝罪は私自身も示していると捉えたならばもうわかっているはずだ。

私が泣いているのは、それは…

「おまたせ二人とも。あれ、ほむらちゃん？」

荷物を纏め終わったのであろうまどかが、戻ってくるなり私の異変に気が付き顔を覗

き込んでくる。

その無垢で愛おしいはずの顔を、いまは直視できない。するのすら烏澁がましい。

「ごめん、なさい…。少しひとりに…。」

それだけを告げ、私はまどかを置いて病室を後にする。

こんなことに意味なんてないのに、片足で無駄に頑張つて階段を上つて。

屋上に出て、すぐの入り口の傍らに座り込んで。

情けなくも膝を抱えて縮こまった。

「ほむらちゃん」

やはりというべきか、まどかは追つてきた。私は顔をあげず俯いたまま返事をした。

「…。一人にしてほしいって言ったじゃない」

「うん。でも、いまのほむらちゃんを放っておけなかった」

彼女ならばこう言うだろうという言葉と共にまどかは隣にちよこんと座りこむ。

「…。ほむらちゃんの気持ち、話してくれると嬉しいな」

話せるはずがないと私は頭を振る。

さやか謝罪を聞いて気づいてしまった。

私がワルプルギスの夜を倒してもなにも感じられなかったその理由を。

あいつを倒したのはマミと杏子だ。私じゃない。

私は彼女たちの手助けもできず、ただ足を引つ張り皆の危機を招いただけ。なのにごうして生きている。

こんな役立たずの無能が当たり前のようにまどかに手厚く看病され魔女を一体も狩ることなく余生を消費していく。

だから羨ましくてしかたなかった。あの二人は命を張って私たちみんなを護れたから。きつと彼女たちに悔いなんてなかっただろうから。

嫌だ。こんな終わり方したくない。こんな結果に納得も満足もできるはずがない。

：．．． そんなことをこの口が言えるものか。

ただひたすらに罪を重ね多くの人を苦しめてきたこの私が、口にしていいわけがない。

「いいんだよ」

私の想いを察したかのように、まどかの声が優しく語り掛けてくる。

「ほむらちゃんは、もっと我が儘を言っていんだよ」

思わず顔を上げる。

まどかは微笑んでいた。私の淀みも醜い本性も、なにもかもを受け止めると言わんばかりに、優しい眸で私を見つめていた。

「まどか… 私…」

駄目だ。口にすればもう止められなくなる。

まどかが許しても、私が許さない。許していいはずがない。

なのに。

「何も残せないまま死にたくない…」

頭では、心では解つていても溜め込んだ想いを止めることはできない。

「私、なにもできなかつた。ここまでやってきて何にも変わらなかつた。

ワルプルギスの夜を倒せてもちつとも嬉しくなかつた。あいつを倒したのは巴さんたち。私は、なにもしてない。

こんな終わり方したくない。あなたたちを何度も死なせてきてこの様なんて嫌。死ぬならあの人たちみたいにカツコよく死にたい！

生き残るならみんなに囲まれて穏やかにすごしたい！こんな情けないままで死にたくない！」

吐き出した。吐き出してしまった。

醜く浅ましい私の本性を、欲望を。

でも、抑えきれなかつた。

だって本当は、まどかが生きればいいんじゃないやなくて、『まどかを護れる私になる』のが

私の願いだったから。

そんな私の願いにまどかは口を挟まなかった。慰めもなにも言わず、ただ全てを受け止めるように寄り添ってくれた。